



小品集（1）



悠空冥海

目が覚めたら、昨日抱いて寝た懐炉が腕の中で冷たくなっていた。自分は変だなあ冷えるはずはないのになあという心持で不思議がっていた。よくよく考えてみると一夜経ったんだから冷えるんだらうというのに行き着いた。自分はそれじゃあ暖めなおそうと思って台所へ行った。お湯が沸かしてあればいいと思った。さもなくば自分で沸かそう。それくらいはしてやってもいい。

果たして台所へ着くとお湯は沸いていなかった。自分以外この家にいないのだから考えてみれば当然である。何を勘違いしていたんだらうと思いながら自分で薬缶に水を入れた。冬の水だから冷たい。薬缶まで冷たくなって、果たしてこの水が暖かくなるのだらうかと馬鹿馬鹿しいことを考えてしまった。暖かくするのである。

火はなかなか点かなくてちょっと手間取った。漸う経って火が点くと、自分はその上へ薬缶を置いた。これで後は待っているだけである。自分は炬燵へ入って一眠りしようかと考えた。いやいや火を使っているのである。寝っかけて火事にでもなったら大変である。自分は置いてあった新聞を開いて、そういえばまだ朝餉を頂いていないなあと思った。それじゃあ御茶漬けでも頂こうかと思って、そういえばお湯は今沸かしているんだと思い出した。全く困った。御飯は昨日の残ってあったから、仕方が無いから海苔を出してきて、よそったご飯に乗せて醤油をかけた。箸を出してきてそれを食べた。食べ終わってもまだお湯は沸いていなかった。遅いものである。自分は苛々した。新聞は読みきってしまった。それじゃあお湯が沸くまでの間何をしようかと思って、そういえばこの間本を借りたのだと思い出して、どこにおいたかと思いあぐねた。探してみると本棚の一番上の所に乗せてあった。まだお湯は沸いていない。どこまで読んであったつくとページを捲っていると、果たして栞の挟まったページに行き着いた。そうそう此処だった。自分は読み始めた。資産家の男が主人公の話だった。男が親類を押しつけ親父から遺産を受け継いで豪遊していた。そうして何の計画性もなしに遊び惚けて、いつしか一文無しに陥るという話書きであった。何でこんなものを借りたのかわからない。不思議である。借りたときの自分の心境を訊ねてみたいと思った。自分は直ぐに飽きてしまって、本をもとあったところに戻した。お湯はまだ沸かない。薬缶に水を入れすぎたと後悔した。しかし今更水の量を減らすのもなんである。自分は大人しく待つことにした。

大人しくしていながら、自分は何でこんなにも懐炉にお湯を入れるのに拘泥しているのだらうと思った。考えてみれば変である。もう夜は終わったのだから、懐炉など必要ないのだ。しかし自分は意地になっていた。懐炉にお湯を入れた後でどうしようかと考えた。折角だからまた懐炉を抱いて眠ろうと思った。そうすればお湯を沸かしたことも無駄にならないのである。いいことを思いついたと自分は思った。そうすると待っているのが段々楽しくなってきた。待つことも楽しいものである。自分はいきいきした気分でした。するとぶくぶくと言う音がする。自分は台所まで行った。薬缶をあけてみると果たしてお湯は沸いていた。しかし自分はそのときになってしまったと思った。こんなに熱くては懐炉に入れても触れないのである。仕方が無いのでちょっと冷めるまでまた待つことにした。こんなことなら早目に止めておけばよかったと思った。しくじった。しかし気分はそれほど悪くなっていなかった。自分は火を消して蓋を開けっ放しにし

ておいてまた炬燵に入った。つつい気持ちよくなって華胥の国へ誘われた。自分は目を閉じた。

気付くと自分は寝てしまっていた。外はもう夕焼けである。自分は寝過ぎたと思った。台所へ行ってしてみると、やっぱりお湯はもう冷え切っていた。しまったと思った。自分の何時間か前の苦労はすっかり無駄になってしまったのである。抜かったなど思った。よもやこれほど寝入ってしまおうとは思ってもいなかった。残念であるし、情けなかった。しかし空腹である。昼餉を取っていないのだから当然なのだが、それでも自分は何かを食べる気にはなれなかった。しかし自分は再び薬缶を火にかけた。お茶が飲みたくなったのである。

そのとき戸を叩く音がした。かすかな音である。自分はこの叩き方に覚えがあった。美音子である。美音子は自分が懇意にしている女性だ。何だかその言い方も味気ないものがある。恋仲の女である。そう考えながら、そうか、今日は美音子が来る日だったかとおぼろげに思った。そういえばこの間、次は今日来るといつていたような気がする。そうかじゃあ今日なんだと思って戸をあけてやった。果たして美音子であった。美音子は、今晚は、と澄ました声で言った。入んなさいと自分は言った。それじゃあ上がらしてもらいます、と美音子は言って、夕御飯はまだですかと訊ねてきた。未だだと自分が答えると、それはよかったと言って美音子は手に提げていたものを差し出した。活きの良い秋刀魚が入ったから一緒に食べようと言うのだった。自分は、うんそれはいいと言って承諾した。台所使いますよと美音子が言ったので、自分は好きに使って良いと言った。いつもこんな風なやり取りであった。美音子は来る度に何かおいしそうなものを持ってくるのだ。そうして二人で夕飯を取るのが慣わしである。自分は、今日は美音子が来るのを忘れていたけれども、夕餉を一人で取っていないで良かったと思った。それは全く幸運であった。そう考えれば寝過ぎたこともちっとも後悔すべきことのように思われなくなっていた。

あなた、さっきまで寝ていたんでしょ、と唐突に美音子が言った。それを秋刀魚をおろしながら言うのである。器用な女だ。自分は何でそう思うのかと訊ねた。だって声がまだ起きていないもの、と美音子は言った。自分は黙って水場に行って顔を洗った。帰ってくると美音子にお早うございます、と言われた。自分は努めて明るくお早うと言った。それを聞いて美音子が笑った。今のは確かに子供っぽかったと自分は思った。

あなた、このお湯は何で沸かしていたんです、と美音子が再び口を開いた。お茶を飲もうと思っていたんだと自分は言った。それじゃあお湯はもう沸いたから先にお茶にしましょうと美音子が言って、お茶を入れ始めた。そうして今ちよっと秋刀魚を焼いていますから、暫くお待ちくださいと言った。自分は頷いてお茶を飲んだ。いい具合に渋くて薄くなく、美味しいお茶だった。美味しいですかと美音子が訊くから、美味しいよと自分は答えた。もう一杯要りますかと訊いてくるから、貰おうと自分は言った。そうして二杯目を飲み終わる頃、そろそろ秋刀魚がいい頃でしょうと言って美音子は台所へ行ってしまった。ちよっとして美音子は良い匂いを連れながらこっちへ来た。手に持ったお盆には今日の夕餉が乗っている。秋刀魚は色よく焼けていて美味そうだった。いつの間だか知らないが、味噌汁も乗っかっていた。器用な女だ。

二人分の御飯を並べ終わると、いよいよ夕餉が始まった。頂きます、と合掌して、まず秋刀魚に手をつけた。美味しい。美味しいですかと美音子が訊くから、美味しいよと自分は答えた。それは

良かったと言って美音子も秋刀魚を食べた。美味しいですねと言うから、そうだねと言った。食事が終わると、美音子は少し歩きませんかと自分を散歩に誘った。うんそうしようと言って自分は美音子と外に出た。いつの間にか外は真っ暗で、星月がもう空に昇っていた。自分は歩き始めた。美音子も隣で歩調を合わせた。

川沿いの道を歩いて、ぐるっと回って帰ることにした。お互い黙って歩いていた。しかし居心地は良い。気分が良くなってきた。そのとき美音子が、あ、と声を出した。どうしたのか訊くと、ほらあそこ、と中州を指差した。あそこに鷺がいるんです、見えませんか。ほら今羽をばたつかせた、と言った。自分はよく目を凝らして見たけれども鷺は見えなかった。灯りは月の影だけである。自分は鳥目になったかと思った。美音子は立ち止まった。自分もその隣に足を止めて鷺を探した。なかなか見えない。自分は苛々してきた。もういい、早く行こうと自分勝手に足を進めようとした、そのときだった。

鷺が飛び立った。はっきりと自分はそれを見ることができた。鷺は一度も振り返らずに向こうの方へ消えていった。隣で美音子が得意そうな顔をしていた。自分は進めようとしていた足を押し止めて、美音子の肩を抱いた。美音子は手を合わせてきた。

自分たちは随分そうしていた。美音子が行きましようと言って、自分たちはまた歩き始めた。肩に回した手は離れてしまった。自分は歩いている間、美音子の手を取ろうとしたが、なかなか取れずに青い苦味を感じた。自分たちは再び黙った。黙々と歩いていた。しかし自分の心のうちは黙ってはいなかった。いつ手を握ろういつ握ろうと考えていた。

家が見えたとき、す、と美音子が自分の手を握った。そうして大きなため息をついた。どうしたと訊くと、いつ握ろうかと思案していたんです、と美音子は言った。なんだ自分もそう思っていたよと自分は言った。美音子は顔を少し膨らまして、だったらあなたから手を握ってくださればよかったのと言った。答える代わりに自分は美音子の手を強く握った。美音子は強い力で握り返してきた。そうこうしているうちに家についた。自分たちは手を握ったまま家に入った。

美音子は自分を引っ張って窓際まで行って腰掛けた。自分は隣に座った。良い夜ですねと美音子が言った。そうだなと自分は言った。少し沈黙があった。自分は、今日は泊まっていけるのかと美音子に訊いた。はい、と随分可愛らしい声で美音子は言った。今にも消えてしまいそうな声だった。自分は美音子を布団に誘った。

することを終えてしまうと、美音子は自分の腕を枕にして寝入ってしまった。美音子は暖かかった。自分が朝、懐炉に拘っていたことが酷く馬鹿馬鹿しいものに思えた。そんなことに拘る必要はなかったのだ。こうして隣に暖かいものを感じられるのだから。自分はすっかり安心して眠りに落ちた。心地よい眠りだった。

目が覚めると、昨日抱いて寝たのがやっぱり腕を枕にして眠っていた。冷たくなっていなかった。それは暖かかった。自分は何だかとても満ち足りた気分になって、腕の中のを抱きしめた。そうして自分は再び眠りに落ちていった。

幸福と絶望を掛け合わせ、織り成すものの名前

中学二年の冬、四十二になる母が死んだ。いや、死んだという言い方はおかしい。正しく言うと、殺されたのだ。強盗に押し入られて、包丁で頭をグサリ。即死だった、というのがせめてもの救いだろうけど、きっと怖かったに違いない。そう、怖かった。今でも夢によく出てくるけど、酷く怖かった。学校から帰ってきたら、ドアには鍵が掛かっていなかった。母は用心深い人で、いつもならチェーンロックまでかけている人だったのだ。三階建てアパートの二階で、西側の一番端だった。隣人はいない。六畳一間で、キッチンがあったけど、お風呂とトイレは共同だった。哀しくなるほど貧相な造りで、鉄筋丸見えの、今にも崩れそうなぼろアパートだった。最近窃盗が多いから気を付けてください、という回覧板をまわしたその日だった。ドアを開けたら、まず感じたのはむせ返るような鉄分の臭い。どこかでかいだことのある臭いだった。母を呼んだが、返事はなかった。いつもならこの時間は、六ヶ月になる浩哉の離乳食を作っている頃だった。寝かしつけたついでに一緒に寝てしまったのだろうか。鍵もかけずに無用心な。それにしてもこの臭いは異常だ。何かあったのか。

靴を脱いで、暗く寒いキッチンと部屋を仕切る襖に手を掛けたとき、部屋の向こうで浩哉が泣き出した。母は珍しく深く寝ているのか、いつもなら例え深夜であっても浩哉が泣けば起きていたのに、起きてこなかった。浩哉は酷く寝つきが悪く、例え寝たとしてもすぐ起きた。そんな生活が半年も続いたおかげで、母も私も睡眠不足だった。私は授業中の居眠りが増えた、それだけで済んだけれど、母はそうもいかなかった。何しろ一日中付き合わなければならない。日増しに翳りの増えていく姿は、見ているだけで痛々しかった。

それとも出かけているのだろうか。そういえば朝、お米があと少しだわ、と言っていたから、買い物かもしれない。出かけるなら出かけるで、鍵くらい閉めればいいのに。とにかく浩哉をあやそうと、私は襖を開いた。

その光景を、私は一生忘れられないと思う。

夕焼けに染まる宵の口。窓から差し込む光は部屋を赤く染めていた。窓に背を向けて行儀良く座っている母。俯いている母の影に隠れて泣き続ける浩哉。光の加減で、母の顔はまったく見えなかった。お母さん、と言おうとしたとき、夕焼けよりも紅い色に気付いた。

私は、臭いの正体を知った。母の額には、包丁が刺さっていた。

はじめは全然理解できなかった。時間が止まったかのように、私は動けなかった。襖をあけて、まだ敷居をまたいでもいない。その格好のまま。浩哉がいきなり、泣き止んだ。

何秒か経った。私には永遠とも思える時間が。再び泣き出した浩哉の声で私は我に帰り、そうしてやっと現状を理解した。ほんの数秒で夕陽は沈み、暗くなった部屋を窓から街灯がくすぶるような光で照らしていた。

我に返った後の私は、自分でもびっくりするほど冷静だった。警察に通報して、浩哉を寝かしつけた。母の身体にはふれなかった。さわれなかった。母の死に様は怖かった。部屋の中央で異様に佇み、正座のまま死んでいる姿は。

警察が遺体を片付けているとき、耐え切れずに吐いた。胃液の味を、私は初めて知った。

今思えば、あの時感情に任せて泣いていればどんなに楽だったろうか。母の身体を揺さぶって、何も考えずに涙を流していれば。泣くことを忘れていた私は、その後のどんな時も泣けなかった。

母を殺した犯人は、時効を十年以上過ぎた今、まだ見つかっていない。

警察で二晩過ごした後、私は始めて母の実家を訪れた。父はいなかった。浩哉の生まれる前年の暮に蒸発していた。母はその時既に浩哉を身籠っていた。覚えている父の顔は、酷く疲れていた。仕事から帰っては母に手を挙げた。給料が入れば呑んできていた。家に帰ることもなくなって、そうしていつしか二度と寄り付かなくなった。浮気相手の女の人にふられて自殺したという話を、このとき訪れた警察署で聞いた。

いつだったか、母が一度だけ父との馴れ初めを語ってくれたことがある。出産を間近に控えた、七月も半ばの頃。

父と母は高校で出会った。一度も同じ教室で学んだわけでもなく、部活が同じというわけでもない。才色兼備の母を見て、父が一目惚れをしたらしい。そうして大恋愛を経て、母が大学を卒業した途端に駆け落ちした。それ以後、私が生まれた後も、実家に訪れることはできなかったという。

母の近寄れなかった実家で、私達は四年暮らした。母の母、つまり私にとっての祖母はできた人だった。二十年音沙汰のなかった娘の残した子供である私たちに、とても良くしてくれた。浩哉の面倒も見てくれたし、私は高校を出ることもできた。本当に、いくら感謝しても足りないくらいだ。

けれども、祖父は私たちを受け入れなかった。汚らわしいものでも見る様な目つきで、同じ食卓に座ることさえ許さなかった。暴力を振るわれたことはないが、四年間、一度も名前を呼ばれなかった。私達の存在自体を、彼は認めていなかった。私はどうにか認められようと、朝早く起きて、学校に行く前に炊事、洗濯、掃除を済ませた。部活などせず、遊びにも行かずに帰宅してまた家事に従事した。それでも、彼の態度は変わらなかった。

そんなこともあって、私は高校卒業を機に、浩哉を連れて自立した。彼とは会っていなかったが、八年後に危篤の報せを聞いて、病室で再会した。最後に立ち会うくらいの感謝の気持ちは持ち合わせていた。認めてはくれなかったが、彼が得たお金で食べさせてもらって、私たちは彼のおかげで生きてこられたのだ、ということは理解していた。

娘をたぶらかした男の血が流れていると思うと、どうしても愛せなかった。

彼は死に際に、もう見えない目で私たちを探し、そう言った。その時初めて彼の優しい顔を知った。そうして「ごめんな、幸子。ありがとう」と。幸子という私の名前を、彼はその時初めて、交わった時間でただ一度だけ口にした。

私は祖父のことが好きになれなかったが、もっと違うふうに出逢えていたら、もっと違うように思えたのかもしれない。

私は浩哉の姉であり、母でもあった。せめて高校までは行かせて、できれば大学も行かせてやり

たかった。私の代わりに幸せになって欲しかった。そういう感情は、多分母性だと思う。祖父母の家を出た後、昔過ごしたようなアパートで暮らした。六畳一間の部屋で、昔と違ってバス、トイレ付だった。家賃はひと月三万円と、酷く安かったが、私たち二人にとっては大きなお金だった。祖父母から多少の仕送りはあったものの、育ち盛りの男の子を養うと、食費だけで消えていった。それでもかなり助けられたが、やはり生活は厳しかった。浩哉はテレビゲームを欲しがったが、テレビすら我が家にはなかった。被災時の為に買った懐中時計についているラジオ。情報源はそれだけだった。電気も殆ど点けず、明るくなれば起きて暗くなれば寝た。お風呂だって特別汚れた時以外は二日に一度しか入らなかったし、トイレの水も流すのは何回かに一度だった。浩哉にはお小遣いもあげられなかった。日々の生活の中で残ったお金は全て貯金して、いつか必要になったときに使おうと、例え苦しい月も手を出さなかった。

一度だけ、本当に苦しくて、それこそ日に一食も食べられないような時、貯金に手を出さずに、援助交際をしようとしたことがある。命を宿すプロセスに、正直言って興味はあった。繁華街に出て、歩くだけで男が寄ってきた。男は指を三本立てて誘ってきた。三万円。一度断ると、今度は指を四本立てた。私は右手を開いて男の前に出した。私の身体でも、この位の価値を求めてもいいと思った。一世一代の覚悟で、初めて体を開くのだから。男は少し考えた後、それで了承した。五万円。それが私の決めた、私の価値だった。

近くのホテルに入り、ベッドに腰掛けると、男は舐めるような目つきで私を見つめた。まだ服も脱いでいない。ただ、腰掛けた。それだけだった。気持ち悪かった。鳥肌の立つ、虫唾が走るような悪寒。視線だけで汚された、そんな気がした。怖くなった。これからしようとしている行為にも、男も。

恐怖。その感情は心臓を食い破るように、私の心を征服した。自分の身の危機。決断の結果。決してときめきとはいえない、跳ね上がる心拍数。耳の奥で誰かの心音が悲鳴を上げていた。タスケテ、タスケテ、と。それは自分の鼓動だった。自分の上げた叫びだった。

男が私に近づいた。期待に、欲望に満ちた眼。電気も点けていない部屋で、その眼はぎらぎらと光っていた。真っ黒い渦が瞳の奥にあった。暗闇の中で光る黒。その輝きは何かに似ていた。過去に一度見たことのある何かの輝きに。忌まわしい記憶の、閉じ込めた悲愴の、鮮烈な西日の中に浮き上がるイメージ。

そう、死んだ母の額に突き刺さっていた包丁が放つ鈍い輝きに。

前とは比べ物にならないほどの恐怖が私を襲った。頭の中で増幅する感情。怖い、恐い。耳の奥で、体の底から心の淵から止めなく湧き上がる絶叫。助けて、助けて。助けテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ助けて助けて、お母さん――

その言葉を引き金に、再び脳裏に一つのヴィジョンが浮かび上がる。

夕焼けに染まる宵の口。部屋を赤く染めていた西日。窓に背を向けて行儀良く座っている母。俯いている母の影に隠れて泣き続ける浩哉。まったく見えない母の顔。夕焼けよりも紅い色。母を染める鉄のにおい。母の額に無造作に突き刺さった包丁。喉まで出てきてそこで止まった、あの

時言えなかった「お母さん」――

母はもういない。助けてくれる人はいない。男がもう一步私に詰め寄った。来ないで。もう一步。捕食者が間合いを詰めるように。いや、その通りだった。厳密な私と男の立ち位置、犠牲者と捕食者。風下から詰め寄る、貪欲な猛獣の牙。逃げなければ、殺されてしまう。

私は、必死で逃げた。一度抱いてしまった恐怖からは逃れられなかったが、せめて男から逃げようと、無我夢中で男の股間を蹴り上げて、うずくまる様子に罪悪感など微塵も覺えずに、必死で。

家に着いたとき、浩哉は寝ていた。一時になろうかというところだった。布団はもともと一つしかなくて、彼は掛け布団を蹴りはがしていた。私は寝巻きにも着替えずに、そのまま寝転んだ。布団を掛け直して、自分と浩哉を包んだ。さっき座ったそれとは違う、暖かで安らげる場所だった。私は彼の寝顔を覗き見た。彼を背中から抱き締めた。彼だけが私の救いだった。私は汚れてはいけないのだ。そう思った。彼がちゃんと育つには、私は汚れてはいけないんだと、その時悟った。私はそれ以来一度も、そういうことをして稼いだことはない。というよりも、私にそんなことが出来るとは到底思えなかった。

その時、もう一つ考えたことがあった。

母はあの時、どのくらい恐かったのだろうか。私が感じたもの以上なのだろうか。最後に恐怖で彩られる死は、どれほど怖かったのだろうか。幸薄い人生を歩んだ彼女は、幸せだと、一瞬でも思えたのだろうか。父と結婚したときは、幸せだったのだろうか。私が生まれたときは？ 浩哉が生まれたときは？ 母は、幸せだったと言ってくれるだろうか。もし母があの日死んでいなければ、その後の人生に、幸せは待っていたのだろうか。

そう、そして私にも同じことが言える。

浩哉は高校に行くようになると、殊に反抗するようになった。些細な事で言い争うのは酷く哀しかった。母親代わりとして、受け入れ乗り越えなくてはならないと知ってはいたけれど、寂しく、哀しかった。ここまで育ててきたことを悔やみさえた。けれど、彼がいなかったら私は生きるのを諦めていただろう。彼を育てるということを自分の役割として、それで生きてこられたのだから。感情は行き場を失った。酷いジレンマだった。

一年ほどそんな日々が続いた後、彼はいきなりバイトをすと言った。バイトをしてお金をためて、姉ちゃんに楽をさせたいと言ってくれた。嬉しかった。いつの間にか彼は大人になっていたのだ。少し寂しい気もしたが、今までの寂しさとは違った。彼は少しずつお金を入れるようになった。生活はだいぶよくなり、毎日の食事に一品増やすことが出来た。ささやかだったが、幸せと呼んでいいものだった。

彼は大学に行かないでこのまま就職する、と言ったが、私はどうにか説得した。その時初めて彼に通帳をみせた。今まで一度も手をつけずに溜めていたお金は、彼が大学に入っても、ぎりぎり生活できるほどの額になっていた。彼は泣いた。号泣した。お姉ちゃん、ありがとう、ありがとう、と私の手を包んで号泣した。彼の涙は暖かくて、今までの苦労も全て流してくれるようだ

った。

それでも、私は彼と一緒に泣くことは出来なかった。

浩哉は大学に行って程なくして、可愛い女の子をつれてきた。彼の彼女は優しく、面倒見が良さそうだった。やわらかい声で「はじめまして」と言われた。それは嬉しい光景だったが、彼が私以外の女性を大切に作る姿は、私を再び寂しくさせた。

私と彼女は気があった。浩哉の話で何時間も使った。小さい頃の浩哉の話を、彼女はいつも聞きたがった。私達の家庭事情にも、理解を示してくれているようだった。私も彼女に浩哉の話をするのが好きだった。覚えている限りそれこそ全部、彼女に話して聞かせた。苦労話もした。彼女はとても涙もろく、感情移入しやすい娘で、話の途中でぼろぼろ涙を流した。いつしか彼女は私達の、浩哉の最大の理解者になっていた。家に訪れるのも、浩哉だけでなく私に会うためだとも言ってくれた。彼女と私は母と娘ほども歳が離れていたが、親友と言っていい関係だった。友達を得たのは久しぶりだった。浩哉を残して二人で出かけた事もした。

浩哉が大学を卒業した秋、二人は籍を入れた。身内だけのささやかな式も挙げた。こうして彼が私のもとを巣立って行って、私は本当に独りになった。彼ら夫婦はよく家に訪れてくれたが、彼らの相思相愛な様を見て、私は自分の中にある一つの感情に気付いた。

私はこの人生の中で、一度たりとも女になっていなかった。女の子だった私は女性にならずに母親になってしまっていた。宿命がそうさせたとはいえ、私はまだ一度も恋をしていないのだ。

「愛されたい、という感情に、気付いてしまった。

それはまったく母性ではなかった。俄然別のものだった。暖かいのではなくて、それは熱かった。思う人もいないのに胸が苦しかった。切ない、という感情を、私は恋をせずに知った。

私は、もうすぐあの時の母と同じ年齢になる。母の代わりに生きた二十年で、浩哉を育て上げた。彼らは子宝に恵まれて、男の子と女の子、二人の子供を授かった。彼は今父親となって、彼女と一緒に子供たちを育てている。その姿は幸福だった。

私も、幸せになれるだろうか。恋愛だけが幸福だとは思わない。事実この二十余年、確かに辛かったが幸せでもあった。その大事業が終わった今、何か別の形で、母がつけてくれた名前、そのままに。

私は母の見られなかった未来を、これから歩いていく。

END

一つだけ、聞きたい。

まだ命あるものに、もっとずっと生きていて欲しいと願うことは、死に逝く者のエゴなのだろうか？

目を開けたら、まず始めに見えたのは、元は白かったであろう、くすんだ灰色の天上。味気ない電灯が二本横に並んで天上から垂れ下がっていて、酷く目が痛い。明るすぎる。家の天井はこんな色ではなかったし、電灯だっでもうちょっと控えめだったはずだ。そもそも棒状ではなく円だったと思うのだが。変だ。記憶の中の自分の部屋と、そこかしこ違うような感じだ。そういえば右腕にも違和感がある。

まあ、いい。それより、今は何時だろう。とても長い時間眠っていたような気がする。時計は確か……そうそう、右の壁に掛かっていたんだ。

そうして右を見て、私は違和感の答えにたどり着いた。

細っこい腕に刺さった針。刻々と体の中に入ってくる点滴。成る程、ここは病院だ。そうだ、思い出した。朝いつものように新聞を取りに門までいったら、倒れてしまったのだ。救急車が来るまでは何とか意識もあったのだが、妙に眠くなって、そのまま深い眠りの底に落ちてしまったのだ。普段の生活が祟ったかな。

今度は左に目を向けた。左腕にかすかな吐息を感じたのだ。

妻がベッドにもたれかかるようにして寝ていた。妻の寝顔など見たのは久しぶりだった。その姿はなかなか綺麗だった。何だ、お前もまだまだいけるじゃないか。

その妻が息を吐くたびに、私の左腕はいいようのないむずがゆさに襲われた。それは暖かいような、くすぐったいような、妙な感覚だった。何かに似ていた。いつか経験した別の感情に、ひどく似ている気がした。なんだろう。思案する私の腕に、もう一度妻の吐息がかかって、再びそれに襲われたとき、私はふと古い記憶の中にある一つの感情に思い至った。その感情の与える一つの感覚を閃いた。

そう、この感情は恋に似ていた。恋に堕ちたときに感じる、あの感覚に似ていた。甘いような、酸っぱいような、そういう類の思い出の中に、それら二つはあった。

前にこんな気持ちになったのは、果していつだったろうか。鮮やかな色などとうに失せて、もうセピアに染まるような、そんな遠い若き日は。

私が思案に耽っていると、一人部屋の扉を開けて看護婦——ああ今は看護師と言うのだったな。失言だ。どうにも頭が廻らないな。後遺症だろうか。呆けでなければいいのだが——看護師が入ってきた。妙齢の女性だ。子供はいるだろう。看護婦、また間違えた。そうそう、看護師、看護師だ。看護師という仕事も大変だろうに。面倒は見ていられるのか。他人事ながら気になっていちいち勝手に想像してしまう。悪い癖だ。

その看護師は私のベッドのそばまでやってきた。くうくう寝息を立てる妻の肩を叩き——ああそ

んな。まだもうちょっと見ていたいのに――起こそうとしている。いくら暖房がついているからって、こんなところで寝たら風邪引きますよ、なんて。ああそうか冬だったのだと妙に納得した。それもこれも暑すぎるのだ。

看護婦さん、起こさんといてくれ。

ん？ おかしいな。自分では当たり前のように声に出して言ったつもりなのだが、どうも声になっていないようだ。自分の耳に届いたのは、ひゅう、ひゅう、という木枯らしのような寂しい音だった。うむ、もう一度だ。一度で駄目なら二度やってみればいい。誰の言葉だったかな。

さあ、もう一度。大きく息を吸って、

「 婦 人 お ん いて れ」

確かに声にはなったのだが、聞き取れないようなかすれ声。ところどころしか発音できていない。自分の耳に聞きにくいことから、他人にはさぞ耳障りな音だろう。

「坂藤、さん？」

ほら、やっぱり看護婦は酷くびっくりしている。

「起きて、る？」

私は起きているが、妻を起こすのはやめてくれ。

「う、そ」

嘘も何も、妻を起こさないでくれと言っているのだ。

看護婦はその顔を恐怖にも似た色に染め、一、二歩後さずると、

「先、セイ、先生！」

大声で叫びながら部屋を飛び出て行った。後ろ手で御座なりに閉めた扉が勢いのままに壁に当たって、腹の底に響く音を叩く。まったく、看護婦がそうやって乱暴に物を扱っていいのか。

「ん」

ああほら、今の音を聞いて妻が夢の底から起きてきたではないか。

妻はむく、と頭を上げると、どこかまだ焦点の定まらない瞳で、

「私、寝ていたのね」

まだ、寝てていいんだ。疲れているのだろう？

「知らない間に、疲れが溜まっていたのかしら」

そうだよ。お前は真面目すぎるんだ。少しは肩の力を抜いて、たまには休んでもいいのに。

「もういい加減歳かしら。ね、あなた」

何言っているんだ。今は人生八十年社会だぞ。あと二十年は頑張れる。

「あなたも、疲れが溜まっていたの？」

そんなことはない、はずだ。倒れた手前言い切れないのがなんとも寂しい。

「早く目を覚ましてくださいね。でもそんなに急がなくてもいいですよ。疲れが取れるまでゆっくり休んで、もう大丈夫だ、ってなるまで、私は待っていますから」

もう起きてるよ。もう大丈夫だ。気付かないのか？ もう起きてる。

声をかけてあげたい。声を出して、起きていることを伝えたい。なのに今度は、ひゅう、という音も出ない。手を挙げようにも挙げられない。声をかけたいとか、触れたい、なんて、それこ

そ十何年ぶりに思っているのに。私の身体は全然言うことを聞いてくれない。普段何気なく動かしている体が、動かなくなるなんて想像もしていなかった。まさかこんなことになるとはな。まったく、世の中上手くいかないものだ。

「もうこんな時間なの？ 随分と長く寝ていたみたいね」

腕時計を見てつぶやく。何時だというのだろうか。外はもう暗いようだが、いかんせん首が上がらないので確かめようがない。まったく、難儀なものだ。

「面会時間、とっくに終わっていたのね。帰らなくちゃ」

そんなこと、言わないでくれよ。家に帰ったってどうせ一人きりなんだろう。だったらここで、傍にいてくれないか。

思ったことが、どんなに強く思っても、口に出せずに、だから伝わらない。ここまで妻の存在を、願ったことなんて未だかつてないというのに。

「じゃあ、あなた。私、帰りますから」

そう言って妻は鞆を手取る。ああ、だからここにいてくれというのに。

「また明日も来ますよ。待っていてください」

明日また、でなく、今からずっと、ここにいることは出来ないのか。

「私も、あなたが起きるのを待っていますよ」

だから、もう起きているよ。もう待たなくて良いんだ。私はもう起きた。身体は動かせないし、口も利けないが、頭のほうははっきりしている。だから。

苦労ばかりかける駄目な亭主の傍に、いて欲しい。今だけでなく、これからも。なあ、死ぬまでだよ。結婚式の時、誓ったろう。あれだよ、あれ。今やっと意味が分かったんだ。病める時も、健やかなる時も、一生寄り添って、生きていくという、あの言葉の意味がさ。

去ろうとする妻の手を、掴もうとして。

やっぱり、手は動いてくれなかった。

ドタドタドタ、と、聞き苦しい足音が、廊下からこっちへすごい勢いでやってきた。

かと思うと、これまた凄い勢いで病室の扉が開かれて、例の看護婦、でなく看護師が入ってきて、

「坂藤さん！」

何もそんなに大声を張り上げなくともいいのに。ここは病院だぞ。看護師が五月蠅くちゃあ、入院患者の精神衛生上よくないのではないのか。

妻は——見られないからよく分からないが——恐らくベッドと扉の真ん中辺りまで歩いた所で足を止め、

「どうかされましたか、看護婦さん」

だから、看護師だというのに。今は看護婦じゃなくて看護師だって。まあ、間違いやすいし、老人の域に達しようとする人間が、いまさらすぐ呼び方を変えられるとは思わないが——私も間違えるし、な。

「どうもこうも、だって坂藤さんが起きて」

「え？」

妻は表情を驚嘆の色に変えた、と思う。

「気付いていらっしやらなかったんですか？」

同じくして看護師も驚きに染まる。

「え？」

妻が声を上げる。掠れた声だ。

ふう。私はため息をついた。

その音は、聞こえたのか。

妻の耳には、届いたのか。

「う、そ」

砂漠を何日も歩いた挙句、元いたところへ戻ってしまったかのような。

そんな、声で。

そんな声になるほど、心配してくれていたのか。或いは、そんな声になるほど、

私は、絶望的な状況だったのか。

「あ、なた」

カツン、と靴が床を叩く音が聞こえた。

ゆっくり、躊躇うように。しかし焦り、リズムは複雑で。

近づいてくる。妻が。

ドサ。何か落ちる音がして。

視界に妻の表情が入って。

ポタ。冷たいものが、私の顔も濡らした。

そう、妻の頬と同じように。

だけど私は、気付いていた。

白の門が、もうすぐそこまで迫っていることを。

一過性脳梗塞。それが私の遭った症状の名前だった。血液の塊が脳の血管に詰まって起きる病気らしい。詰まっていたのが一時的だったから良かったものの、もしあと二分でもその状態が続いていたら助かる見込みは無かったという。事実私は三日三晩生死の境を彷徨い、脳死になるか植物人間状態になるかそれとも復帰できるのか分からなかったという。すんでのところ意識を回復し、鬼籍に載るのを免れたのだ。もっともその代償として腰を含む下半身に痺れが残ったが、命の対価には安いものだ。別段動かせないわけではなく、歩くことも出来れば階段も上れる。私にはそれで十分だった。何せ、白の門はもうすぐ其処まで近づいているのだから。

一ヶ月ほど入院し、リハビリを済ませた。途中一人部屋から四人部屋に移されたが、周りにはみんな良い人たちだった。妻は毎日見舞いに来てくれたし、入院生活に不便は無かった。暇な時間は妻とたわいも無い話をした。こんな風に言葉を交わすのはいつ振りだったのだろうか。懐かしさよりもむしろ新鮮ですらあった。

今まで、忙しさに託けて私は妻を殆ど顧みてやれなかった。私たちは晩婚だった。結婚したのは、私が四十四、彼女が四十三の時だ。毎日通っていた喫茶店の顔なじみ。だがしかし生活の妥協からではなかった。愛はしっかり抱いていた。私も彼女も、愛情無しで苦楽を共に出来るほど器用ではなかったのだ。出逢って三ヶ月で入籍した。早いといえば早かった。披露宴はやらなかった。働き盛りの齢四十を越えた人間が披露宴をやることに抵抗があったのだ。その代わり式だけは挙げた。と言っても、カトリック系の小さな教会で、誰も呼ばずに二人だけで。誓いを交わし指輪を交換した。共に生きて行くのだという自覚があった。出逢うのは遅かったが、これからは二人寄り添い助け合い生きてゆこうと。その時は思っていたのだ。

しかし、文字通り心を亡くすほどに忙しい日々は、私達の間一種の壁を作っていたんだと思う。ガラスで出来た透明な壁。お互いその存在に気付きながらも、壊すことは出来なかった。

そう、私がいけなかったのだ。妻のほうに歩み寄ろうとしなかった私が。妻は常に私を気遣い、それ故に私の身勝手を咎めなかった。私は文句なしで愛されていたのだ。二十年経って、やっとそれに気付けるとは。愚かな男だ。気付いたのは生死の狭間を目前にした後。しかも、もう遺された時間も少ない。

私は、この一ヶ月で体の自由を取り戻したが、しかしそれが一時的なものだということに気付いていた。医者に宣告されたわけではない。そんな予感がしていた。恐らく私の命は、もってあと一年と言うところだろうと。白の門が――死への扉が、もう直ぐ其処まで迫ってきていた。私は自分の死期を察したことに戦慄していた。ほかの人間も死期を悟れるのだろうか。死にたくはなかった。当然だ。今まで一生懸命働いてきたご褒美に、これから楽しい余生が待っているはずだったのだ。妻と共に人生を謳歌してゆくつもりだったのだ。

しかし、そう思っている一方で、私は妙に落ち着いていた。冷静且つ正常だった。即ち、不思議なことに私には覚悟があった。気付かぬうちに。死をまるで人事のように見つめている自分がいた。いつのまにかそうできるようになっていた。

だが、差し迫る死は人事ではなく、確実に私自身に襲い掛かろうとしているのだ。厳粛に。定

められた避けられぬ最後の宿命として。寿命が。

そして私は、思うのだった。私の死は確定した。どんなに足掻こうと飲み込まれるのだ。私は一年以内に死ぬ。泣こうが喚こうが変わらない。私はその覚悟が決まった。しかし、妻はどうだろうか。覚悟が出来るだろうか。散々苦勞を掛けて、さあこれからだ、と言う時に夫に先立たれるのは。私の身勝手な願いを、聞き入れるのは。

そう、私は身勝手にも、願ってしまったのだ。

もうすぐ死に逝く者の分際で。

まだ命在る彼女に、もっとずっと生きて欲しいと。

一ヶ月ぶりに我が家に帰った。やはり我が家がいい。結婚と同時に建てた一軒家はたいして広くは無かったが、子供のいない夫婦二人にはちょうどよい広さだった。

倒れる前まで、私はこの家にただ寝るためだけに帰ってきていた気がする。仕事に没頭する余り、残業しても連絡も入れない日が続いていた。それでも妻は待っていてくれたことを思い出す。つい調子に乗ってお酒を飲みすぎたときも何一つ文句も言わずに私を世話した。できすぎた妻だ。私には勿体無い。

今まで気付いていなかったが、妻は毎日部屋の掃除をしているらしい。築二十年程経つというのに埃が溜まった形跡は無い。今まではそんなこと気付きもしなかった。倒れたのはいい機会だったのかもしれないな。

私は、仕事をやめた。

もう六十過ぎだ。実はそろそろ退職しようと思っていたときだったから、ちょうどよかった。四十年頑張った分だけの退職金を貰った。ふむ。これだけあれば生きてゆけるだろう。年金も入ることだし。

しかし、問題なのは日々の過ごし方だ。私は仕事しかしてこなかった。趣味は持っていない。本を読むのも音楽を聴くのも好きではあるが趣味と言うほどではない。絵もかけない。小説も思い浮かばない。囲碁も将棋も指さない。あれもしないこれもしないでどうやって二十四時間過ごしてゆけばいいのだろう。とりわけ困ったことに、近所に友人と呼べるような知り合いは一人もいない。妻は妻で近所の知り合いと仲良くおしゃべりもしているようだが、まさか私がその中に入るわけにもいくまい。なかなかどうして暇なものだ。子供もいない。ほとんど晩婚と呼べるものなのだから仕方ない。

時間はゆっくりと過ぎてゆく。それでいて刻々と日は移る。私は昼寝をする習慣がついた。まったく、のんきなものである。午睡を楽しむようになっていた。華胥の国にも馴染んでいった。こうして五衰のどれかを歩むのだ。天人ではないけれども。

さあ、どうやってこれから暮らしてゆこうか。どうやって恩返しをすればいいのだろう。どうやって分かってもらえばいい？ どうやって労わってやればいい？ どんな言葉どんな行動で示せばいい？ 今まで何もしてこなかった。記念日に気の利いたプレゼントも、休暇にどこか旅行をすることもしなかった。誕生日に至っては何時だったかも思い出せない。確か十月だった気がする。あと三ヶ月もない。だが少なくとも私が生きている間に一回は来る。何かしたい。今までの二十年分。この一年で。他でもない妻に。私の人生を締めくくり、彼女の人生を少しでも幸福で彩るために。

私は、何を為せばいいのだろう。

退院して一ヶ月が経ち、季節は春になった。

私は妻と一緒に買い物に出かけるようになっていた。近くのスーパーまで歩いて行って、私が大半の荷物を持つ。スーパーというものは中々面白いものだ。今まで余裕を持って眺めたことがなかったので、六十にもなってスーパーに面白さなど感じるようになっていた。妻はそんな私を見ながら夕飯は何がいいですかなどと聞く。そうだな酢豚にするかと言うとそうしましょうと答える。こうやって夫婦連れ立って歩くのもなんだかえもいえぬ感慨がある。しみじみとした奥深い喜びがある。談笑がある。協力がある。生活感と安心がある。穏やかでゆっくりとした日々の習慣。

私は料理も少し覚えた。妻に野菜の洗い方から教わった。出来の悪い生徒は教師を何度もあきれさせた。それでも二人一緒に協力して御飯を作るのは楽しいのだった。終わりの見えた日常の中の大切な一瞬――。

こういう一瞬が積み重なって、最期に笑えるのならそれもいい。私はそう思うようになっていた。それは迫り来る危機に対する決断としての覚悟ではなく、もっとゆっくりと、ゆったりとした毎日の中に感じる充実感。死ぬことに覚悟はできても、人生に悔いが残ったらまったく意味が無い。私は倒れて覚悟を決めた。そうしてこの一ヶ月で、「日常」に幸福をみつけた。それは確固たる充実感だった。満足感だった。未練の欠片も残っていない。

いや。最後のは嘘だ。誤魔化しだ。満足感も充実感も、問い詰めれば私ひとりの身勝手な覚悟だ。だが妻は？ 私は意識を取り戻したあと、こう思ったのではないのか。私は覚悟が出来ている。だが妻はおそらく違う。

だから、この余生は妻のために過ごそうと。

それはそれで身勝手なのかもしれない。もしかしたら無駄なことかもしれない。自己満足で終わってしまうかもしれない。結局大きな悲しみを、少しも和らげることなく背負わせてしまうのかもしれない。私は何もいわず一人きりで旅立ち、妻は一人きりで過ごさなければならなくなるのかもしれない。何も出来ず、苦労ばかりかけて、ちっとも省みる事無く、夫が死んでしまったら、妻は何と思うのだろう。私は愛情をしっかりとっている。しかし、ちっとも表さなければ、感じることなどできやしない。表しすぎれば重荷になるかもしれない、いや、なるだろう。が、少しも表に出てこない愛情は、そこにあると本当に相手は信じられるだろうか。私の気持ち、私の妻に対する思い、謝罪、感謝。そして、この身勝手な願い。

それは死に際の私の最後の我侷だ。しかしそれは妻を文字通り命が消えるまで縛り付ける呪いだ。妻を苦しめ、寂しい日々を過ごさせる禁句だ。しかし私はそれを言う気である。我侷を、我侷と知っていながら。私は妻をこの先永劫縛り付ける。願いとして。望む。いや、そうさせる。何という自分勝手な男。何という傲慢な願望。何という、何という無責任。

だから、私は許されようとは思わない。おそらく妻は私の最期の言葉を聞き入れるだろう。約束するだろう。全ての神と自分の命を懸けて誓うだろう。あれはそういう女だ。私はそれを知っている。だから私は言おうと思う。この私の、正真正銘、愛の証として。

そう、私にとってこれは愛情だ。紛れもない純愛だ。これほどに真摯な願い、真っ直ぐで穢れの無い想い。

愚直さが傷つけることを知っている。正直が時として醜いことも知っている。いつの時においても真が美に勝るわけではないことを知っている。

しかし、それが何だ？ それは全て愛情だ。狂おしいほどの想う気持ちだ。

わかってほしいとは思う。だが、わかってくれとは言わない。わかってくれるようにこれからを過ごそうと思う。日常の中で、その想いが届くように。

ある日の午後だった。

妻は出かけていた。何でも近所の友達と、最近出来た近くの温泉に行くらしい。下見にいつてきますね、などと言って昼過ぎに出て行った。恐らく四時五時までは帰ってくることもあるまい。

私はいつの間にか昼寝をしていたらしい。気付くと三時を回っていた。喉がかわいていた。何か夢を見ていたような気がするが、とりとめの無い内容だったような、意味深なものだったような気もする。とにかくどうでもいい夢だった。直ぐに忘れてしまう類の。

ベッド際のスリッパを引っ掛けて立ち上がった。水が飲みたい。リビングに向かおうとしていた。

しかし、立ち上がった瞬間だった。襲ってきた。強烈な眩暈、吐き気。思わず私はベッドに腰を落とし、くらくらする意識を必死で取り戻そうとした。腕の先が震えているのが分かる。むしろ痺れている。痺れが腕の先から全身に広がる。がたがた震える。恐怖が心の臓から全身に広がる。ぶるぶる震える。ああ、何てことだ。まだあれからたった二ヶ月ではないか。まだ早い。十ヶ月ばかり早い。早すぎる。まだ何にもしていない。まだ何にも伝えていない。くそ、そんな、こんな状態で死んでしまうのか。再び倒れてそれきりなのか。妻は？ 妻はどうなる。悲しませたいのか。嫌だ。何せまだ私は最後の願いも伝えていない。

死にたくない。いや、死は認めよう。それが差し迫っているのも認めよう。もう六十年余り生きてきたことも認めよう。私が直ぐに妻に伝えられなかったのが悪いのも認めよう。優柔不断なのは百も承知の上だ。それでもまだ迎えが来るのは早すぎる。

そこまで考えたとき、急にさっき見た夢が蘇ってきた。不思議に紫がかかった背景。妻の姿。だいぶ若い。多分出会ったときくらいだろう。当時よく通っていた喫茶店。いつも同じ顔があった。年代が近そうだったから話しかけやすかった。不思議と馬があった。いつしかそれが日課になった。お互い配偶者がいないとわかると早かった。結局三ヶ月で入籍した。二人だけで式を挙げた――。

ああ、あの時、あの時だ。私は恋に落ちていたのだ。くすぐったくて、あたたかくて。走り出したくなるような、それでいてここにいたいような。耳の奥で脈打つ音が妙に大きく聞こえて、喉が渇いて。そんな思春期の初恋みたいな、こそばゆい感覚。私は確かに、恋に落ちていたのだ。

なんだか、安心したな。

そうして、あっさりと意識はおちた。

再び私が眼を覚ましたとき、そこは決して病院ではなかった。見慣れた自分の部屋の天上。窓から西日が差していた。

まだ、生きている。

手を握ってみた。動く。痺れは無い。足を上げてみた。動く。問題は無い。意識は嘘みたい

にしっかりしている。

玄関が開く音がした。そうして妻の声が聞こえる。ただいま、と言っている。時刻は五時半だった。

私は立ち上がった。眩暈も吐き気も起こらない。なんだか無性に妻の顔が見たい気がする。私はリビングに向かっていった。

「おかえり」

リビングに入って妻に声をかけると、何故だか自分の声がいつもより優しげだと感じた。自分でそう思うのだから他人から見ればさらに分かりやすいのだろう。妻はほんの少しだけびっくりしたような顔をしたが、直ぐに笑顔になると、ええ、遅くなりました、なんて言った。

妻の姿を見た私は言葉をなくした。

妻は湯上りの香りを仄かに残していた。多少白髪交じりの髪がつややかに光っていた。六十を数えるというのにその髪は若々しかった。石鹸の匂い。苦勞を重ねてきた目の端の皺。

私は思い出していた。触れるだけで心臓が破裂しそうだった妻の手。数えるほどしか重ねていない唇。体を重ねたのはその半数にも満たない。お互い四十にもなって誰を抱いたことも抱かれたことも無かった。恋をするということさえもしかしたら初めてかもしれないと思うほどに、私たちはお互いが最初の相手だったのだ。

私は静かに妻に近づいていく。二人掛けのソファ。一人分飽いている。そこは私の場所だ。妻の隣だ。私は近づく。そのたびに心拍数は跳ね上がる。あと少し。妻がこちらを向く。顔をほころばせて自分の隣を叩く。

そうして、やっとの思いでソファに腰掛けた。何だか疲れた。大きく息を吐いた。やっと落ち着いた気がする。体の緊張も解けた。

と、そこへ妻が体を預けてくる。私の肩に頭を置いて寄りかかる。思わず、
思わず、私は妻の肩を抱いた。

「どうしたんですか、急に」

すぐ近くに聞こえる妻の声が耳朶に優しい。こんな声だったろうか。こんなにもやわらかく優しい声。

「珍しく隣に来て下さって。歳に似合わずドキドキしてしまいましたよ」

「たまには、やりたくなっただけだ」

さっきは優しげだった私の声も、今度はどこか冷たい感じがする。冷たくしたいわけではない。勝手にそうなっただけだ。

「そうですか。久しぶりですね、こういうの」

「ああ」

何だかむやみやたらに恥ずかしい。赤面しているような気がする。妻の顔は見えないが、きっと同じような状況だろう。全く、六十四にもなって。

「ねえ、あなた」

「何だ」

「今日はいい日ですね」

「ああ、そうだな」

そうして、そのまま夕飯時まで寄り添っていた。

夕飯が終わり、お茶を啜っていると、妻が台所の奥でなにやらがさごそとしていた。そうして一つの箱を取り出してきた。

「なんだ、それ」

私が訊くと妻は何か含んだように笑って、

「小笹の最中ですよ。温泉に行く前に買ってきたんです」

成る程確かに小笹の店の箱だった。そうか、最中か。私はそれが大好物なのだ。特にここの最中は味が濃くなく、かといって薄くなく、さらっとした味わいで奥深い。うむ。帰りがどうも遅いと思っていたらこれを買ってきていたのか。

「本当は帰って直ぐ開けようと思っていたんですけど」

と、そこで私を横目で見ると。私は妻の言わんとしていることを悟って窓のほうに目をそらした。くす、と妻が少し笑う。何も笑わなかったっていいものを。仕方なかったのだ。たまにはそういう日もある。私はそれに答えられずに違うことを言った。

「わざわざ吉祥寺まで出るとはご苦労さんだな」

「いいえ。あなたが一人寂しく過ごしているんじゃないかと思って」

ふふ、とまた笑う。なんだ、それは。そんなことを言われたら、私はお礼を言うしかなくなるじゃないか。

「随分気が利くな」

しかし素直にありがとうと言うのは憚られた。いや、恥ずかしかった。大丈夫、多分伝わっていると思う。だって妻はあんなに微笑んでいる。

「じゃあ、ありがたく頂くか」

はいどうぞ、と妻は私の前に二つ最中を出す。白餡と黒餡だ。餡はこしてある。私は包装を丁寧にはがすとまず白餡から口に入れた。口どけが良く味は芳醇。いつもの味だ。

「うむ、美味しい」

私は続けて黒餡も口に入れる。

「そうですか。それは良かった」

妻はそう言って自分も最中を頬張る。

「ほんと、美味しいですね」

そう言って相好を崩した。私はそんな妻を見ながらお茶を飲む。最近はどうも濃いお茶しか飲めなくなった。渋いくらいが丁度いい。妻はそんなこと言われなくとも分かっているようで、我が家のお茶はいつも濃かった。上等な最中と高級なお茶。うむ、ちょっとした贅沢だ。

外はもう暗くなっている。夕餉の後の春の宵口。風も心地よく温かく強くなく、きっとそろそろ桜なんかも見ごろだろう。別に咲いていなくたっていい。私はあることを思いついていた。こんな思いつきは久しぶりだ。今日はどうも何か変に閃く日らしい。その内容もどうしてか恥ず

かしい。顔が見たいだの隣に座るだの別段どうということもない、夫婦なら恥ずかしがる必要も無いことにいちいち恥ずかしがってしまう。妻は妻でそれが嬉しいらしく私を見てはやわらかく笑う。そんなに笑うと皺が見えるぞ。だけどその皺の具合もまたいいのだ。安心というか何というか、思わずこっちまで笑顔になる。もっとも妻が嬉しいと思ってくれるだけで私は笑顔になるのだが。

うむ、いっそのことだ。今日は変な日、ということで、私は妻にこの思いつきを言おうと思う。前に何度かしたことがあるのだし。

「なあ、お前」

「なんででしょう」

妻は顔を上げてまたやわらかく笑った。

「その、散歩に、行かないか？」

「え、お散歩ですか。どうしたんです、急に」

等といいながら微笑みは崩さない。怪訝な様子も読み取れるものの、実際心うちでは喜んでいるように見えた。

うむ、じゃあ、たまには変になるのもいい。

「行きたくないか？ そうか、行きたく、ないか」

「いえ、そんなことないですけど」

六十過ぎの爺が拗ねる。いや、そういうふりをしているだけだが。はたから見たら全く滑稽な図だろうと自分でも分かっている。だがたまにはな。たまにはやってみたくなるものだ。妻が困った顔をする。そう、その顔も見たかったのだ。

「行かない、か？」

「いえ、行きましょう」

その妻の声はどこか諦めたようでもあり、また心から喜んでいようでもあった。

家を出ると近くの川原の方へ向かった。辺りはもう暗く、星月が眩いくらいに光っていた。いい夜だ。散歩をするには丁度いい。

私と妻はゆっくりと歩いていた。リハビリで歩けるようになったとはいえ、まだ早く歩いたり出来ない。一步一步ゆっくりと歩くほかはない。妻は私の歩調に合わせて左側を歩いている。寄り添いながら歩く姿の、なんと夫婦めいたことか。会話は無い。しかし心地は良い。沈黙にこそ安息と満ち足りた何かが在る。それは紛れもない、愛情だ。そこに、互いが傍にあるだけで良い、というゆるやかで強固な気持ち。腕があたる。肩が触れる。そのたびに温かくなる。温もり。静けさ。同じ歩調。

「久しぶりですね、こういうの」

夜空を見ながら妻が言った。確かに、久しぶりと言うか、なんと言うか。もうずいぶんだったような気がする。前にいつしたかなんて思い出せない。そのくらい、前。

「そうだな」

「あなたは忙しかったですし」

まあ、そうだ。

「それでも、たまにはやればよかったと後悔しているよ」

本音だ。散歩がこんなにいいものだとは。

「まあ」

くすくす、と笑む。

「だったら私から誘ってあげればよかったですね」

ああ、それは嬉しいな。

「そうしてくれても、良かったな」

「でもどうでしょう。仕事から帰ってくるといつも疲れていましたから」

断ったんじゃないですか、と言外に含む。まあ、確かにそうかもしれない。

「そうだな。でも、今はもう断らないよ」

「あなたから誘ってくれましたしね」

そこで妻はもう一度笑う。喜んでもらえるなら、幸いだ。

「良い夜だな」

自然と、言葉が零れる。

「ええ。本当に」

川原を回って、私たちは帰途についた。

家に着くと、もう九時を回っていた。仕事をしていたときは起きていられたのだが、今となつてはこの時分になると眠気を催す。私は風呂にでも入って体を温めようと思った。同時にまたある一つのことを思いついた。

今日は本当にどうかしている。一体どうしてこんなことが沸くように思いつくのか。自分が不思議でたまらない。

だが、まあ、いい。

言ってみよう。多少は吃驚するだろうが、きっと笑ってそうしてくれるに違いない。私は平静を装って、今しがた風呂から上がったばかりの妻の元へ行った。

浴室のドアは閉まっている。中で衣擦れの音がする。妻が寝巻きを着ている。別に恥ずかしがる必要など何処にも無いのに、私はなぜか照れてしまった。どうにも言い出せない。深呼吸を一つする。足りない。もう一つ。落ち着いた。私はドアをノックする。

「待ってくださいね。今出ますから」

妻は暢気な声で答える。

「どうしたんです、そんなに慌てて」

続けてそう返ってくる。

「いや、その、なんだ、」

どうにも口が動かない。しどろもどろになってしまう。

私はもう一度息を多きく吸った。

「たまには、同じ布団で寝ないか？」

ドアの向こうから一切の音が消えた。吃驚して静止する妻の姿がありありと浮かぶ。まあ、そうだろうな。

深呼吸一つの間。

「いいです、よ」

そうして、今夜はそうすることになった。

ベッドは倒れた後に買った。布団に出入りするのが敷布団より楽なのだ。病院生活でベッドに慣れてしまったというのもある。とにかくそんな理由で買ったベッドは、一人で寝るには広すぎた。私も妻もそんなに体の大きいほうではないから、多分狭さを感じることは無いだろう。枕も元々大きい。両脇がすこし高く、寝ている間に頭から落ちないようにになっている。安心設計だ。

私は左端に寝転がっていた。右手は水平に伸ばし、その上に妻の首が乗っている。腕枕なぞ何年ぶりだろう。右腕に感じる妻の温もり。柔らかさと重さ。渴ききっていない髪の毛の感触。

「久しぶりですね、こういうの」

妻が今日何回目かの同じ科白を言った。その回数だけ私は妻に何か言っていることになる。

まあ、しかし本当にどれもこれも久しぶりなのだ。数えるほどしかない同じ記憶から、何年と経っている。理由を繰り返すつもりはないが、忙しさとは文字通り心を亡くすことなのだとしみじみと感じる。恋慕の情も愛情も、日々食卓に御飯をあげる為に亡くしてしまっていたのだ。なんと寂しい日々であったか。今思えば何故結婚したのか昔の自分に問い詰めた気分だ。家政婦同然に妻に家事全般を押し付け、自分は毎日会社で机に向かう。帰ってくれば疲れていて話もろくにせずに寝てしまって、散歩に行くどころか一緒に寝る余裕も無い。

「なあ、お前」

「なんででしょう」

急に、謝りたくなった。苦勞を掛けたこと、何もしてやれなかったこと。今更になって気付いたこと。

そして。

あと何ヶ月かで、私が死んでしまうということ。

医者は何にも言っていない。ただ予感がするだけだ。

そう言ったら、妻はなんと思うだろう。

いや。

伝えなければならない。もう二ヶ月以上経った。これ以上引き伸ばしてもしものことがあったらどうするつもりだ。ましてや今日の夕方だって、危うくそうになってしまう可能性だってあったのに。伝えなくてはいけない。義務とか責務とかそういう問題ではなく。真実になるであろう実感。二ヶ月余り延ばしてきたのだ。

「その、なんだ、」

「はい」

どうしたんですか、とこちらを向く一組の水晶が問いかける。その暗闇の中で分かる輝き。老

いてなお褪せない無垢な色。子供のような口元と全てを知っているかのような微笑――。

「私は多分、あと十ヶ月以内に死ぬ」

沈黙。私は妻の顔を見れない。

「予感がするんだ。倒れたときから」

妻は何も言わない。だがその視線がこちらに注がれているのは分かる。

「黙っていて、ごめん」

私は、そこで妻の顔を見た。

暫く、沈黙が続いた。むしろ不動であった。停止のように思われた。しかしそれは違っている。私の視線を妻のそれが放さない。私は妻の目を見つめる。妻は私に焦点を合わせている。

妻の手が私の着ているパジャマの上着の裾を掴んだ。引っ張った。その細い腕のどこからこんな力が湧いているのだろう。私の視線を放さない。その手は私を放さない。私は瞼に少し水を溜めた。雫となる前に妻が言った。

「本当、なんですね」

出てきたのは疑問ではなく確認だった。詰問ではなく受容だった。伝わってしまったのだ。私の言いたいことの全てが。その全ての感情が。

妻は私の涙を拭いた。よく見ると妻の目も潤んでいる。私は妻の目を拭いた。袖の先が少し濡れた。妻の涙で。私とその瞳から零させた、悲しみで。

「ああ、多分、な」

否定したいのは山々だ。むしろ誰かに否定して欲しい。しかしそれは妻では駄目だ。妻にだけは受け入れて欲しかった。私がもう直ぐ死ぬということ。避けられないのだと。たった一人でいい妻にだけは、受け入れて欲しい。否定されたい、されたくない。自己矛盾。感情のジレンマ。それでも事実として予感はそのにある。ただの予感だ。虫の知らせだ。だが、それは避けられない。

「分かりました」

妻は、ふう、とため息をついた。

「それなら、わたしもお供いたします。幽冥境を異にするのは忍びませんから」

そう言って、情死を望んだ。いままで見たこともないような笑顔で。全てを悟り、覚悟を決めて。まるでそれが自分の人生の最終目的であったように。

そう。そこにあるのは紛れもなく愛情だった。自分の命すら捨て去れるほどの。そういう類の愛情であった。

妻は、私に対して、それほどまでの、愛情を抱いていたのだ。こんな私に。妻を顧みなかったこんな亭主に。

しかし、私の願いは。私が妻に願うのは、それとは全く正反対だ。その強い覚悟も、最大級の優しさも、愛情も。全て悲しみに向かわせる悪魔の言葉だ。呪いだ。

私が死んでも、生きて欲しい。

しかし私は、言えなかった。言えるはずがなかった。妻はこんなにも私を受け入れ、共にあることを願い、そして共になくなることさえ望んだ。その覚悟を、誰が打ち消すことができるだろう

。この私が何故、そんなことが出来るだろう。その笑顔を、その覚悟を、壊すことなんて、できない。

弱い男だ、私は。あれほどまでに自分の願いにあれこれ理由をつけておきながらそれを伝えることもできない。純愛だ証しだといいいながら結局示してやることもできない。自分だけ死ぬ覚悟を決めておいて、妻の気持ちなんて全然考えてやれない。これだから駄目なのだ、私は。

それでも、言い返す言葉なんて、思い浮かばなかった。

「それでは、そういうことですので、おやすみなさい、あなた」

妻が私の裾を握っていた手を放した。一度こちらを向いた後、瞼を閉じてしまう。そのうち呼吸が一定になって、とうとう夢を結んでしまった。

結局、私は何も言えなかった。

尿意を覚えて目がさめた。あの後すぐに寝入ってしまったらしい。腕の上で変わらず妻が寝息をたてていた。私は妻を起こさぬように、ゆっくりと腕を妻の首の下から抜くと、静かにベッドから降りてトイレに向かった。

用をたして戻ってくると、なんとなく眠気も覚めてしまって、とりあえず妻に腕枕をしながら起きていた。妻の寝顔を眺めている。中々飽きない。

時刻は二時を回った頃だった。草木も眠る丑三つ時。聞こえるのは時計の針が動く音、時折外を通る車、そして妻の寝息。私は数時間前を思い出す。

あれほどまでに強い妻の願い。私はどうすればいいのだろう。妻の言うとおりに、妻がしてくれるように、妻の望むように二人して彼岸の黄泉路を歩めばいいのか。それとも私の中にまだくすぶっているあの願いを妻に伝えればいいのか。

私は妻を死なせたくない。共に黄泉に行くよりも、私は妻には生きていて欲しい。何よりも強い想いだ。それは変わらない。しかし妻の願いは違う。共にあらんとしている。共に消えようとしている。それも確固たる覚悟を持って。

生きるのを望む愛情と、死ぬのを望む愛情。どちらも愛情であることに変わりはないのに、おかれる立場が違うだけで、こんなにも違う結論を出してしまうのか。そう、立場が違うだけなのだ。お互い逆の立場になったら、お互い今とは反対のことを希うのだろう。私が妻の立場になったら、一緒にゆこうと思うに決まっている。妻が私の立場に立ったら、私にだけは生きていて欲しいと願うに違いない。どちらも、相手を思うがこそ、なのだ。そこに優劣など、まして善悪などありえるわけがない。

私は妻の頬に触る。

その時だ。妻の右目、上になっているほうから、涙が零れたのは。

涙は、静かに、溢れていく。

妻を少しこちらへ引く。彼女の顔が肩にある。

夢を、みているのだろうか。だとしても、どんな夢を。

「あな、た、」

ん、寝言か？

「そんな、なんで、」

何、だ？

「死んでしまう、なんて、なんで、」

私が、死ぬ夢、だろうか。だから、その目から涙が零れているのだろうか。それとも寝る前に話した予感のことだろうか。あのときは気丈に振舞えても、本当は泣くほど悲しかったのだろうか。

分からない。だが、少なくとも、その涙は。

私のせいだということは、痛いほどよく分かった。

やっぱりわたしは言えない。妻にそんな願いは言えない。死んでしまうだけでこれほどまでに悲しむ彼女に、その悲しみをずっと抱き続けて生きろと言うことは出来ない。連れ添って二十年。お互い幸薄い人生の歩み手だったが、その最後の二十年は幸福だった。少なくとも私はそう思う。妻もそう思っていることだろう。人生の三分の二を過ぎたところで、百年の愛を誓える相手にめぐり会えたのだから。不満はない。そうやって二世を契り、永久を歩み、寄り添って未来永劫を共にすれば良い。そうやって生きてゆけると言うのなら、私は彼女と共に死ぬことを許容しよう。

そのかわり、お願いだ。

いつどこで何に生まれ変わったとしても、妻の傍に私を置いてくれないか。

神様がいるかどうかは知らない。あいにくキリスト教にも仏教にもヒンドゥー教にもましてや神道にも目覚めなかった。あるのはそれらの教義を支える思想の知識だけ。だがもしも唯一の神様がいて、人間の魂は巡り巡る輪廻を転生するもので、夫婦が黄泉路を共にすれば、神様が二人を来世でも出会えるようにしてくれるというのなら、私は喜んで妻と共に天に昇ろう。滅に入ろう。

だからどうか、お願いだ。

涙なんて、流さなくていい。これ以上、悲しみは襲わないのだから。

そうして、あっという間に一年が過ぎた。

私は再び病院のベッドに寝ていた。階段から転げ落ちてしまったのだ。情けない。足腰はもう役に立たない。運動もしないから筋肉が段々衰える。手が上がらなくなり、喋ることさえ億劫になってくる。いくらリハビリをやっても駄目だ。回復に向かう兆しは見えない。リハビリをやらなければ直るわけもない。しかし普通にやったのでは到底足りない。やりすぎれば逆に体を壊す。加速度が日に日に大きくなってゆく。それは白の門までの距離を確実に縮めて行く。もう私にはわかっていた。目の前だ。正真正銘、この瞼を開けば、そこに。一年前は閉じられていた扉が、今や遅しと大きく開いている。待ち構え、吸い込むように。足も手も心さえ捕らえ、魂を引きずり込んでゆく。逃れる術も、逃れようと思う気持ちもない。あとはただ、ゆっくりと屍になってゆくだけだ。

妻は毎日見舞いに来てくれる。彼女は私と反対に、日に日にどこか元気になってゆく。吹っ切れたふうというか、肝が据わったのか。残された現世での時間を精一杯楽しもう笑い合おう一緒に過ごそうと病室にやってくる。墓はもう作った。二人だけが入る墓だ。今まで暮らした街の郊外にある大きい霊園の片隅に。

私は、遺書を書いた。妻には内緒だ。看護師に頼んで私が死んだときに妻に渡してくれるように手はずを整えた。看護師は最初動揺こそ見せたものの、最終的には承諾した。女は強い。末期の老人の無茶な願いを、最後は目に強い光を湛えて請け負ってくれる。

あれから、十ヶ月かけて色々考えた。そして、答えを出した。直接妻に言えなくて、わざわざ遺書まで用意したのだ。

結局私は、妻を死なせたくないのだった。どんなに綺麗な絵空事を並べても、それは譲れない想いだった。まだ命ある彼女。彼女にはもっと生きていて欲しい。私と共に死のうだなんて許さない。たとえどんな神様に許されようが私はやっぱり認めない。妻にはどうしても生きて欲しい。来世で再び逢えなくても良い。もう二度と言葉を交わせなくても良い。その顔を見ること、いや、街中で袖を掠めるほどの縁も無くなったって良い。

それでも、まだ命あるものに、もっとずっと生きていて欲しいと願うことは、死に逝く者のエゴなのだろうか？

しかし全ては妻に委ねよう。私が身勝手に死んだ後、辛く悲しいのは彼女なのだから。彼女が私の遺書を読んで、それでも共に黄泉に潜るといふのなら止めはしない。彼の世で両手を広げて迎えよう。

それでも私は願っている。彼女が生きてくれることを。その命が自然と尽きない限り、この世に在り続けてくれることを。

さあ、そろそろだ。お別れのときが来た。妻が病室に入ってくる。今日は良い日和ですね、などと言いながら。ああ、そうだな。確かに良い日和だ。こんな日に死ぬのも悪くない。

妻がベッドの端に寄る。彼女の顔が真上に来る。

私は布団の中で握っていたナースコールを押した。これで私が死んだそのときに、妻に遺書を手

渡されるだろう。

空いているほうの右手で、妻の手を探る。あった。腕に力は入らない。それでも精一杯握る。妻は最初戸惑っていたが、そのうち納得した顔になる。優しい笑顔だ。今更になってもっと生きていられたら良かったと思う。私は左手でも妻の手を握った。この温もりを持ってゆきたかった。覚えておきたかった。せめて最期の瞬間だけは、この暖かさに包まれていたかった。

妻が私の手を握り返す。両手で私の手を握る。小さな手。その手が私をこんなにも安心させる。ほっとする。この手に包まれているのなら、一人で旅立つのも恐くはない。

ああ、最期にどうしても言っておきたい言葉があった。

私は必死で口を動かす。ゆっくりと喉は音を紡ぐ。

「ありがとう。愛している、幸子」

言葉は妻に届いたのだろうか。想いは伝わったのだろうか。

沢山苦勞をかけてしまった。何にもしてやれなかった。それで自分が最初に死んでしまう。許してくれるだろうか。願いは聞き入れてくれるだろうか。いや、そんなことよりも。

感謝している。二十年、共にいてくれてありがとう。私は随分幸せだった。あなたの温もりが、私をどんなに安心させたか。心地よかった。ずっと傍にいたかった。

なあ、私はあなたを幸せにできただろうか。心地よいと思ってくれたか？ 隣にいたいと、この私の、そう思ってくれたのだろうか。

今になって訊きたい事が溢れてくる。言いたい事はそれより多い。だけれどそれを言う時間は残されていない。

ならば私は、最期の力を振り絞って、

この両手を、離さないでおこうか。

妻の唇がわずかに動く。急に視界が黒くなる。瞼を開けていられない。酷く眠い。しかしどこか心地よい。だんだんものが考えられなくなる。ああ、もう眠ろう。暖かな手に抱かれて、最愛の温もりのなかで死ぬなんて。

眠りに落ちる最期の一瞬。

妻の声が、確かに聞こえた。

「お疲れ様です、あなた」

Fin.

最終兵器コーヒー牛乳

俺の彼女、コーヒー牛乳。一日二本は必ず飲む。それどころか三本も四本も飲む。あればいくらでも飲む。なんてたってマイハニー、何回だって会いたいものだ。やわらかな紙パツクの感触。その冷たい体を俺の手が温める。七月の暑い空気にぼうっとした俺の頭を彼女は癒してくれる。持ちつ持たれつ、良好な関係だ。いや、持っているのは一方的に俺だけだ。

夏だ。

呑気に蝉なんか鳴いている。山の向こうに入道雲が見える。空を切る飛行機雲。ここは学校の屋上。

夏休みまであとわずか。日数にするとあと七日。もう授業なんてものは聞くだけ無駄骨。馬鹿と煙は高いところへ。南校舎の屋上へ。

暑い。

俺は本日三度目となる彼女との逢引に来ていた。ちゃんと言えどコーヒー牛乳を買ったのが本日三度目。だけどそれじゃあ余りにも色気がないってものだ。コーヒー牛乳は愛しの彼女。待ち合わせ場所は自販機前で、彼女の腰に手をやって、人目を盗んで屋上へ。誰もいない放課後まであと一時間の午後。要するにサボり。だがその一時間は誰にも邪魔されない大切な二人の時間。つまり俺にとっては大学受験で使いもしない化学の授業なんかよりもよっぽど有意義だってコト。単位だけとればあとは気にしない。一回サボっても大して響かない。まあ、もっともサボるのはこれで四回目だけだ。

さて、じゃあ、そろそろいいかい？

俺は コーヒー牛乳 彼女 に話しかける。優しい眼差しで誘いかける。

彼女は照れを含んだ声で、え、だってもう今日は二回もやったじゃない、なんて言う（幻聴）。そんなつれないことは言うなよ。実は期待していたんだろ？

そう答えて俺はストローを刺す。彼女の体がぴくっと震える。オイ、そんなまだちょっとしか入れてないって。だって、待ちきれなくて（幻聴）。まったく、ホントにおませさんだな。それなら激しくやっちゃうぞ。いいから、お願い、早く…（幻聴）。しょうがないなあ、分かったよ。あーでもやっぱどうしそうかな。まだ早いかな。もう、焦らさないで…（幻聴）。

そうして、感動のキス。

口の中にふわっと広がる コーヒー牛乳 彼女の味。甘くて、だけど

ちょっと苦い。冷たいんだけどどこか温かい。匂いまで鼻腔をくすぐる。だめだ、我慢できない。俺は彼女を強く吸い上げる。彼女のからだぎゅっと締まる。

最高だ。これこそ最上だ。ここは屋上だ。なんといってもこのシュチュエーション。彼女とキス。うわあいお。これぞまさに至福のとき。喉を潤すコーヒー牛乳。俺はなんだか恥ずかしくなって空を見上げる。サンサン太陽。南風。午後の屋上。積乱雲。

と、そのとき コーヒー牛乳 彼女 が言った（もちろん幻聴）。

ねえ、どうして空ばかり見るの？

言外にこっちを向いてと含んだ言葉。直接言わないところがなお可愛い。だから答えることに

した。俺から君へのアイノコトバ。

何でって、君が眩しいからさ。

うそ、太陽のほう眩しいに決まっているじゃない。

そんなことない。俺にとっては君のほう眩しいんだ。

「何で？」

何でって？ だって君は俺の愛する ^{コーヒー牛乳}彼女 だからね。

「ふうん。そうなの？」

あ、何もしかして疑「激しい独り言だねー、魚住君」ってうおあ？

げ、幻聴じゃない!? (幻聴だという自覚はあった)

「しかし君がそれほどまでの ^{ハードジャンキー}特殊趣向者だとは思ひもし
無かったよ、アタシ。」

そう言ってニコリと笑うは我がクラスの女子、言ってしまえば「不良」なコ、遅刻欠席及びにサボりは当たり前、それでも成績優秀な、ボーイッシュ美人さん、水原真紀。いつの間にだかとなり座って紙パックジュースをちゅーちゅー飲んでいる。

な、何で？ 何で会話に入ってくるんだいやまさかもしかして全部口に出してたのか俺？ うわマジですかなんたることだ。バカバカバカバカ、魚住真人のバカー！

「うん、アタシもそう思う。」

「え、今の声に出た？」

「て言うか、全部。」

「そ、それはアレかい、君が眩しいからとか全部かい？」

「うん。期待してんだろとかおませさんとか激しくやっちゃうぞとか愛する彼女だとかその他諸々、全部。」

ってことは最初から全部かつ！

「まあ、そうね。アタシ君が来る前からここにいたし。」

な、何で気付かないんだ俺。

「まあでも、楽しかったわよ、実際。クラスじゃ影も薄くて、でも真面目で品行方正な優等生君が授業サボってその挙句コーヒー牛乳相手に愛を語る姿は。」

うわああああああ。何てこった。恥ずかしすぎる。まさか見られてしまうとは。折角クラスで目立たないようにイメージ作ってきたというのに (と言う台詞は授業をサボる人間が言うべきではない)。

「あの、水原さん？」

「なあに。」

「このことはどうか他言無用で。」

「やだ。」

なにい!? ヤダだどこの野郎いや女郎。手前そんなことが罷り通るとおもってるってのかああん？ てめえなんてあんなことやこんなことや挙句の果てには×××にピー (放送禁止用語) してやるぞこのアマア！

……落ち着け俺。動揺しすぎて人格変だから。アタマ可笑的からさあ。

「まあ、そんなことされるのはもっとイヤだからやめとくわ」

しかもまた喋ってたのか！（もう涙）

「でもね一、妄想癖に加えてそういうシュミもあるとは。知らなかったなあ、アタシ。」

そう言って水原は少し距離をとる。うう。自分の発言のせいとは言えショックだ。

「いやあのなんと言うか言葉の綾？ 混乱したアタマが何か勝手にべらべらと！ つまりそんなわけでほんとうに思っているわけじゃけっしてなくてどうか許していただきたいく。」

「まあ、本当にやるとは思えないし。」

「そうそう。やる勇気なんてあるように見える？」

「何それ、やる気はあるってコト？」

また間違えた。だから水原さんそうやって遠くへ行かないでいくらあんまり親しくなかったって言ったって何か悲しいからお願いしますよ。

「いえ、やる気もありませんええありませんともよう。ほらアタマが！ アタマがほら可笑しくてどうも。暑いからかなきつとそうだよねそういうことにしておいておくれ。」

「ふーん、まあいいけど。」

良かった、あっさり引いた。変態鬼畜男の汚名をかぶらずに済んだ。

「それより、さ。魚住君。」

「な、なんでしょう？」

水原はぐっと近寄ると俺に向かって何かたくらんだよな目を向ける。いやまあそれも問題だけど何が一番大変かってそのなにあれだよさらさらふわふわの髪の毛とか柔らかそうな匂いとかなんかそういう女の子特有のほらあれ、あーもうなんか言葉でてこないしなんでもいいやあれだよあれがどうもこう近くによるとね、タイヘンね、こうなんかくすぐったいような感じになるわけですよ思春期の高校生男子はいくら妄想に彼女がいても。いやあの浮気とかじゃないよ心配しないでマイハニー。

「他言しないからさあ、」

「なん、でしょう？」

水原はさらにぐっと近寄ると、（だからその距離はやばいってば）

「放課後ちょっと付き合ってくんない？」

は？

.....

.....

.....

.....

な、なななななな。

何故なにどうしてそうなるのねえちょっと水原さん、え、なにそれってちょっとあれですかもしかしてあれなんですか、ちょ、待て待て待て待て。

これってデートのお誘いか？

うわいやそんな。そんなあなたそんないきなりですよ困りますそんなのだってほら俺にはも

うコーヒー牛乳と言う素敵な彼女がほらねえいやまあ嬉しいですけどそういうわけじゃなくて、どうすりゃいいんだ俺。

「じゃ、そういうことで放課後校門ねー。」

っておい！ 水原さんアナタそうやって有無を言わず勝手に決め付けるのは酷いんじゃないですかそんなことされたらアンタ校門で待つてしまうじゃあないですか。

*

と言うわけで放課後校門付近に俺はいる。片手にはいつもの通りコーヒー牛乳。いくらなんでも水原と二人っきりってのは憚られるので連れて行く。大丈夫浮気なんかじゃないただちょっと口止め料代わり。心配するなよ、マイハニー。俺が愛しているのは君だけさ。

「なに、君はまたそんなことやってんの。」

「うお！」

いつの間に。またそうやって知らない間に隣にくる。

「ついさっき。今しがた。ちょうど君が独りごちてた時に。」

全然気がつかなかった。

「あんだけ喋っていらやね。」

ああやっぱ口に出してたのか俺。

「まあいいわ。ねえ、今手持ちは？」

は？

「いくらもってるのか聞いてんの。」

「ひぐちさん一枚くらいだけど。」

「よし、十分。」

何何何？ どこに行こうというんですかアナタ。五千円で十分な所……ゲーセンか格ゲーの対戦相手は見知った顔じゃなきやイヤか言っとくが俺は強いぞゲーセンで格ゲーなんかやったことないけどでもうん強い気がする。それともアレか、カラオケか暗くて狭い部屋に二人っきりでむふふかいやそれはいくらなんでもまずいだろカラオケは歌うところだぞ魚住真人、決してそういうそのなんというかがわしいことをする場所じゃない。

それにほら ^{コーヒー牛乳}彼女 いるし俺。じゃあ何だ、じゃあなんなんだ水原真紀俺になにをさせようと言うんだ。は！ やっぱりいかがわしいことなのか手順は全部省略か誘ってんのかまさか、まさかそんな×××ホテルですかいやいやそんな。いやそんないやいや。困るってそれは困るって。だってよ良く考えてみてよまだ俺キスさえしたことないんだよまあコーヒー牛乳ストローで飲むときキスとかさつき言ったけどさいきなりそんなのレベル高すぎて俺正直期待にこたえられるかどうか心配だよそれとも勇気を起こさせようって魂胆かい無理だよダメだよ無駄だ ^{コーヒー牛乳}

よ水原真紀。それにほら俺 ^{コーヒー牛乳}彼女 いるし。何度も繰り返

すようだけど愛すべき彼女がいるわけでありまして二股とか浮気とかそういうのはほら男のビガクに反するわけでありませよ。そんなワケでそういうのは困るなあ水原真紀。もちろん嬉……いやいや。

「で、そろそろ出発してもいい？」

「え、あ、はいどうぞちなみにどこに？」

吃驚したああ吃驚した。

「言っとくけどゲーセンでもカラオケでも君が暗に言ったところでもないから。残念でした。」

うわやっぱ喋ってたのか。どうにかなんないかなあこのクセ。

「じゃ、じゃあ、どこに？」

水原はまるで子悪魔のような笑みを浮かべて、

「買い物に付き合ってもらおうわよ、魚住君。」

はい？

*

ああ、成る程。

右手も左手も千切れそうだ。

水原が俺を誘ったのはこういうことだったのか。

右手には大きな紙袋（たぶん五キロはあると思う）。

左手にも大きな紙袋（同じく五キロはあると思う）。

しかも右手にはずっとコーヒー牛乳抱えているので紙袋が持ちにくいことこの上ない。

でもまあ確かにこれは女の子一人じゃ運べないよねやっぱ男が手伝ってやらないとねうんそれはそうとこんなにいっきに買う必要があったのかい水原真紀。

「いいじゃない、別に。服と小物しか買ってないわよ。」

「服と小物が袋二つで十キロですか。」

「うるさいわね。男の子でしょ、頑張っで。」

そう言う水原は右手にクレープ左手に鞆。いくらなんでも不公平じゃないかいそれは。

「いいのよ、別に。ばらされたければそれで。」

うう。卑怯なり水原真紀。その服やら小物やらのお金だって元はといえば俺のお財布に入っていたひぐちさんじゃないか。

「じゃあ尚更君が持つべきでしょ。」

どんな理屈だよホントにもう……。

「つべこべ言わない。君は今日一日アタシの奴隷なんだから。」

いつの間にそんなことに！

「まあ別にやりたくなければそれでいいわよ。但し明日中には君の赤裸々な性癖がさらけ出されるわけだけど。」

「やります。」

「よろしい。」

うう、人間って弱い生き物。

「でもさ、ホントに何でこんなに買う必要があったわけ？」

せめてワケは教えてくださいよ。

「何でって、夏休みじゃない、これから。」

「それが？」

「休みになったら色々出掛けてみたいじゃない。」

「うん。」

「海とか山とか都会とかに。」

「うん。」

それは分かるけど、大量に服を買い込む理由にならないと思うんだが。

「だって毎回同じ服じゃイヤじゃない。」

「はあ」

「大抵一緒にいくメンバーって同じになるでしょ。毎回同じ服じゃやってらんないわ。」

「そんなもんなのか？」

「そんなもんよ。」

「一緒に行くメンバーって？」

「目下検討中よ。」

「ふうん。」

「なによ、何か文句ある？」

「いや、別に。」

納得したのかしてないのか。水原はクレープの最後の一口を食べ終わると今度はアイスを買っている。チョコミントとストロベリーチーズケーキの二段重ね。

「太るよ、それ。」

「いいのよ。運動するから。」

「じゃあこの荷物片方持つとか。」

「冗談。乙女に力仕事させるつもり？」

「乙女……？」

「そこに疑問持たない！」

水原は肘を思いっきり俺の脇腹にぶつける。

「ぐう」

ぐうの音が出た。なんだそれ。

「大切に扱ってよね、その荷物。水着も入ってるんだから。」

……ぼっ。うわ何かそれ聞いたとたんに恥ずかしい。

「何々どうした男の子。アタシの水着姿がそんなに見たい？」

「……いえ、別に。」

「ちなみに黒よ。もちろんビキニね。最近の水着は股上も浅くって。」

……。もう、聞いてらんない。

「どうしたの魚住君。顔が赤いよ熱でもある？」

楽しんでるよこの女。からかってそんなに面白いか！

「面白いね。」

あ、そうですか。まあそうですよね。反撃開始。

「実はホントに熱っぽいんだけど。」

「え？」

「何かアタマぼーっとしてきた。」

「う、うそ。」

「やば、あーもうくらくらしてきた。水原さん、一つお願いが。」

「な、なに？」

「そのアイス一口ちよーだい。」

……………。

……………。

見詰め合うこと約五秒。水原の体がふるふる震えたかと思うと、

「バカあ！」

「ぐふ」

「あんたね、世の中には言っていない嘘と悪い嘘があんのよ。その辺分かってるの？」

「い、痛い」

「ああもう心配したアタシがバカだった。殴られて当然よ。」

「いや、しかし元はといえば、」

「なに、言い訳するっての？ サイトー。魚住真人最低。今日のことクラス中にばらしてやる。」

」

「はあ？ お前それは卑怯だぞ。」

「五月蠅い！」

そう言って水原は俺の両手から紙袋を奪い取ると後ろに振り返って走ろうとしたところで、

「ああん？ いきなり後ろ向いたらあぶねーだろお嬢ちゃん。」

ぶつかった。しかも相手が悪い。サングラスにアロハシャツ、ピアスに金髪、強面。喋る口調もどこかアレな、ヤのつくお仕事らしき人。

マジかよ、俺が悪いのかもしれないか俺のせいなのかそ

うなのか俺が^{ふざけ}巫山戯たのが悪いのかそれで水原はぶつかったのか。

「なあなあお嬢ちゃん、危ないってのはわかるよなあ？」

上半身でぐいぐい詰め寄るヤのつく男。大して水原はむしろ冷淡。じとっと足元から頭の先まで眺めたかと思うと、

「何よ。アンタこそ人のすぐ後ろ歩いたら危ないってのが分かんないわけ？」

ぜ、全然冷淡じゃないよまるつきり正反対だよねえちよつと水原さん相手が俺ならともかくね、そういう外見の人にはね、それなりの対処法っていうのがね。分かんないわけ？

「ああん？ 何だこのアマ」

お兄さんはぐいっと詰め寄る。しかしオールドタイプのヤのつく人だな。むしろオールドファッション？ 俺ミスドじゃ一番好きなんだけどな。

「何よ。」

対して水原も負けてない。あのさあだからさ火に油かけてどうするのさ水原さん。だけどきつと放つといちゃダメなんだろうなああそうだよねわかった止めに入るよ。

「あの、ちょっと二人とも、」

「テメエがぶつかってきたんだろうが。」

「注意してなかったのはそっちもでしょ。」

ああ、止まらないの止まってくれないの困るよそれは二人ともだんだんヒートアップしていくしさあ。

「水原さん、良いから行こうよ。」

「良くない！」「良いワケあるか！」

くわっ、とこっちを向いた怒り顔二つ。あれもしかして火に油注いだのって、俺？

「大体テメエは何なんだよ。ああ？」

「大体アンタが言い訳するのがいけないんじゃないの。」

あ、なにももしかして全部俺に怒りの矛先セットオン？ いやそれ困るってホントああもう不幸だー！

仕方ない。謝ろう。きっとそれで大丈夫。俺は水原の腕を取って、

「あ、いや、すみませんホントこいつはちゃんと俺が連れて行きますんで、」

「巫山戯けんな！」

ボコッ。頬が凹んで吹っ飛ばされる。うわ俺格好悪いしかも痛いし殴られた。何で謝ったのに何で殴られるわけしかも俺が？

「ちょっと、大丈夫魚住君？」

流石に目の前で殴られれば心配になるか水原真紀。ううもうなんかそれでいいやじゆうぶん。だって呼び方戻ったし心配されてるし。ああもう水原ゴメン。だからその男放っておいて早くどっか行こうぜ。

「ちょっと、何すんのよ！」

ああああ。ばかあ。水原真紀のばかあ。どうしてそう言うかなホントもう放っておこうよそういう相手は相手にすればするほど付け上がるっての知らないの？

「ああ？ 何だ何か文句あんのか？」

「あるに決まってるでしょ！ 何してくれんのよ！」

ホントに全くだ。ああ痛い。でも水原さんもう良いよ。

そこで俺は気づいてしまった。

コーヒー牛乳
か、彼女 がない？

俺の右手につかんでいたはずの コーヒー牛乳 彼女。うわどこ行っ

たどこだいマイハニー。目をやる見つける走り寄る。道端ギリギリ溝の手前。角が凹んで無残な姿。も、もしかしてさっき殴られたときに？ ゴメンね痛かった大丈夫？

コーヒー牛乳
彼女 から返事はない（当たり前）。て、てめえなんてこと！

どこかでなにかが切れる音がした。多分頭の奥のほう。

*

「ああ？ 邪魔だから除けたんだよ。何か悪いか。」

何その言い草。ほんとムカつく。ぶつかったのはアタシなのに何で魚住君殴るわけ？

「それとも彼氏が倒れて幻滅か？ 何ならワビ代わりに相手してやろうか？」

「彼氏じゃない！」

うん。違う。たまたまちょうど良かっただけ。そういうんじゃない。

「だったらなおさら相手してやるよ。」

そう言って男はアタシの手をつかんだ。

「いや。放して痴漢！」

「ああ？」

振り払おうとするけど男の手は私を放さない。気持ち悪い。男は意外なほどに力が強い。アタシはぐっと引き寄せられる。そのときだ。

「おい、お前。」

男の肩に置かれた手。声の主は、魚住君？

「ああ？ 何だよ？」

男が後ろを振り返る。アタシは引っ張られて同じ方向を見る。

「よくも、やってくれたな。」

吃驚した。魚住真人が、怒ってる？ アタシがあんなに意地悪したときには全然怖くなかったのに何で？ アタシがこの男に連れて行かれそうになったから、なの？

「な、何だよ。」

男も明らかに魚住君にビビっている。確かにホント怖い。どんな目してるか良くわからなくて、オーラというかなんというかなものが見えてきそうさ。

「てめえ、」

ぐいっ、と魚住君が男を引っ張った。男の手がアタシを放す。

「これでもくられ！」

そう言って魚住君は右手を強く握る。握られているのはもちろんコーヒー牛乳の紙パック。いつの間にやらストローが刺さっている。つまりどうなるかって言うと、

「うわ、何すんだ。」

男の顔面目掛けて迸るコーヒー牛乳。目から鼻の穴から容赦なくコーヒー牛乳は男を攻撃する。……変なの。

「俺の、」

コーヒー牛乳がなくなって魚住君は言った。

「俺の彼女に、手を出すな！」

え？

そ、そんな。

そんなこと言われたって、アタシ……。

「く、くそ、今度から気をつけろよ！」

男は魚住君の剣幕に押されて退散していく。うわ弱っちい。まあ気持ちはわかるけどね。それより、お礼を言わなくちゃ。

アタシを助けてくれてどうもありがとう、って。喧嘩の原因はアタシにもあるし。でも、本当に。

魚住君は、アタシのことを。

彼女だって、思っているの？

それなら、アタシも。

君のこと、実はね、

「あー大丈夫かいマイハニー。痛くなかったゴメンねホントにあんな男に君を」

え？

「ひっかけてしまうなんて怒っているよねでも我慢できなかったんだお願い許してよ、ねえマイハニー」

アタシは魚住君を見る。空になった紙パックに向かって話しかけている魚住真人。

そうだ。忘れてた。

こいつはコーヒー牛乳相手に愛を語る妄想狂なんだ！

「あ、水原さん、水原さんも大丈夫コーヒー牛乳かからなかった？」

な、ななな。

「どうしたの水原さん？ あ、やっぱりかかったた？ うわゴメン無我夢中で」

「アンタなんて」

「え？」

「アンタなんて、知らない！」

「えええ？」

アタシは全速力で走り出す。荷物は置いてきたままだ。

「ちょっと水原さん、荷物忘れてるよ！」

後ろで魚住君が叫ぶ。知らない。乙女の心を弄んだ奴なんて。

「水原さん、いくらクレープとアイス食べた後だからってそんな全力疾走しなくても！」

もう、ホント、ばか。

Fin.

ひかりのたび

ふしぎな ひかりの たびをしよう

きみは きみいがいに もうひとりを つれていっていい

*

目が覚めるといつもとかわらない天井が見えた。無機質な白い壁面に吊り下げられた電灯。いつもとおなじ自分の部屋。

自分の境界線上に布団が触れる。意識の限界線にそれを感じる。熱にうなされたみたいに働かない頭でさっきまでみていた夢を思い出していた。

ふしぎな ひかりの たび

どこへゆくのか知らない。僕は暗闇のなかにいるみたいだった。自分の境界線にも意識の限界線にもなにも感じない。空気の触れる感触さえない。闇の中ただそこにある感じ。浮かんでいるのとも違う。縫い付けられたようでもない。意識がそれを内包する肉体がその場所に置き捨てられたような感じ。そして僕の線がだんだんと侵食されてゆく。線があやふやになって闇の中に解けていきそうになる。意識も触覚も虚ろなものになってゆく。僕は僕の線がわからなくなってゆく。

きみいがいに もうひとり

そこで一つの違和感を感じる。この闇の中にいるのは僕だけじゃないような感覚。誰かの線に僕が触れる。溶けていって広がってゆく僕の存在が誰かの線に憧れる。ああ、僕はこの線を失った。線の存在は懐かしくてこの僕の意識を放さない。いつしか僕はその線に向かって集約してゆく。誰かの線のなかに入りたくなる。衝動は激情のように認識を超えていって、その誰かの線の内側を感じたいと思う。僕が触れるその線は僕の存在に警戒する。大丈夫、きみは広がってゆくだけだ。自分が怖いと思っていたものを無理に薦めようとしている。そうしてまでも線を欲する。ただ垂れ流すように限りなく拡散して行くのは恐すぎる。だからその上限を規定する線を欲する。限界へいってみたいとは思わない。限界はきっとどこにも無いから。メビウスの環のようにこの空間は無限に続いてゆくのだろう。僕は僕の前いたところなんて分からなくて何処までも広がってゆく中に散らばりすぎた意識が別の居場所を見つける事無くそこから拡散がまたはじまる。この誰かの線の中へ入らなければただ薄れて行くのが続くのだ。恐くなって怖いという意識に安心して僕はまだ認識を失っていないことに気付く。まだ、僕は僕としてここにいる。だけどそれも時間の問題だ。そのうち直ぐに線をなくした僕は認識も意識もなくしてただ存在するだけの存在になってしまうに違いない。

たびを しよう

そうして僕は線を犯し始める。線に触れた瞬間に愛おしさがこみ上げる。僕の意識を認識を縛り付けていたこの境界線が今は懐かしくてたまらない。この線のなかはきっと安心して休めるんだと思って僕は僕の存在はその線を遂に越えてゆく。中には別の意識がまだ残っている。それを線の外へ追い出すとやっとのことで僕は安心する。眠くなって頭が働かなくなってきて僕は遂に目を閉じる。目があることにまた安堵して僕は眠りの淵へ落ちてゆく。

もうひとりを つれて

目が覚めるといつもと同じ天井。無機質に白い壁面と吊り下げられて止まった電灯。いつもと同じはずの自分の部屋。

自分の境界線上に何かを感じる。意識の限界線にそれを感じる。僕は何かを振り払う。床に落ちて音を出したそれをぼうっとした頭がその支配する目で捕らえる。さっきまで僕が入っていたはずの肉体。しかし僕には線がある。意識に認識にそれを感じる。じゃああれはなんだ？ 僕の肉体とまったく同じ形をしたあの線は。

ふしぎな たび

頭の中に声が響く。僕の線は薄れてゆく。嫌だ！ またそうやって散らばってゆくのか。またそうやって広がってゆくのか。あの冥い闇の中で唯一浮かび上がった線の中を離れて。輪郭だけ白く光る形の中を離れてゆくなんて。

きみと もうひとり

そこで僕は何かを見つける。何だ、これは。僕のものじゃない認識。僕のものじゃない意識。僕のもっていた線とは全く違う存在の定義。輪郭だけじゃなくてその内側まで白く光って、あれはさっき僕が振り払った僕の元の線。決して入らせてくれない境界線。明確に引かれたボーダー・ライン。ああ、こんな線が僕にも欲しかった。

意識が急速に広がってゆく。そのどこにも線が見つからない。それでもどこにいても隣に白い存在がある。中身まで光る存在。どこまでゆこうとどこへゆこうと必ず隣にそれはある。決して触らせないくせに。だんだん認識が薄れてゆく。伴って意識も薄らいでゆく。ああ、僕は僕の線を引けずに結局このまま広がってゆくんだ。見つけた全ての線に憧れて自分で線引きをしない僕は。このままなにも感じなくなってそれでも続く旅をしている。いつからそうしていくのかわからない。どこへゆくのか知らない。暗闇だけは分かるけれど、自分の境界線も意識の限界線も感じない。何かを感じるのもわからない。この僕の存在はただ広がって行くだけ。広がって散らばって二度と収束することはない。線に触れることが出来ない。だんだん僕は眠くなる。だけ

ど閉じるべき目を感じない。休めるべき意識がわからない。だけど僕は眠りにおちて行く。そのまま、目覚めることがなくても。僕はただずっと、広がって消えるのだ。

ひかりの たび

Fin.

1 愛情

「君と僕」

自動販売機に硬貨を入れてボタンを押した。
ガタン、と音がして商品が出てくる。
不特定多数の誰かための、不特定多数の中の一つ。
ああ、それは何という奇跡だろう。幾つもの中で出会う一組。
ああ、それは何という偶然だろう。数あるものの運命的偶然。
そこまで思って僕は心とある考えに行きついた。
ああ、君と僕もそんな確率が引き起こす運命的偶然の奇跡なのだ。

「私がもし上手に踊れたら」

私がもし上手に踊れたら、
貴女の手をとって誘うのに。
私がもしワルツの一つでも知っていたら、
貴女とステップが踏めたのです。

私は全く何事も不器用な人間で、
今まで生きてきたのが不思議なほどなのです。
でもだからこそ思うことがあります。
――私は、貴女に会うために――

私がもし上手に喋れたら、
貴女に近づいて話しかけるのに。
私がもしもう少し勇気を持っていたら、
貴女と楽しくお喋りが出来たのです。

だから私は今、貴女を思うだけなのです。
貴女を思い、貴女と私を思い、私が生きてきたことを思います。
そして私は思うのです。
――私は、貴女に会うために――

「願望」

私は貴方を待っているのです。
本を読み、空想を巡らし、音楽に耳を傾けながら。
それでも貴女を思っているのです。
外はもう暗くなってきました。
ただ一人、寒い部屋で、私は貴方を待っているのです。
だけれども、かといって特別不安になるわけではありません。
私は貴方に満たされているのです。
なぜなら私は貴方の在ることに愛を感じ、
同様に不在にも愛を覚えるのです。
それは少しも寂しくなく、ちっとも不安にさせません。
寂しさは愛情の願望です。私はその愛情だけを綺麗に切り取ります。
不安は信頼の願望です。私はただ信頼だけを丸く切り抜きます。
でも、だからこそ私の願い望むところのものが在ります。
私はただ、貴方に会いたいのです。

2 夜空

「夜の鷺」

走る鷺を追いかけて月の影を見失った
どんなに速く走っても走る鷺に追いつけない
気付いた時には深い森の中蝶を見つけた
目の前を飛ぶそれを啜ってしまったのは何だ？

靴の片方を何処かへ置いてきてしまった
いつの間にか鷺は空を飛んでいた
その口に案の定挟まった蝶
今度は飛ぶ鷺を追いかけて走った

羽は持っていないから空飛ぶ鷺に追いつけない
いつしか見失ってその時は海辺にいた
夜の砂浜を蟹が這っていた
ああ、やっと月の影を見つけた

空を見上げれば満月一つ
影を落として海にも一つ
空飛ぶ鷺が横切って
海の上のそれも二つに切られた

「夜の風景」

真っ暗な南の空に
わざとらしい上弦の三日月
溶けかけたバターみたいに
闇に滲んでいる

さて、東の空からは
冬を代表する星座が昇り
煌々とした輝きを放ちながら
少しずつ冲天しようとしている

西から放射状に伸びる灰色
夕焼けをそのまま覆い隠したような雲
段々と黒に飲まれていきながら
隠された星の姿が現れようとしている

そうして、北の空には
いつも通りの北極星が
一つだけその位置を変えずに
静かに高らかに、光っている

3 世界

「地球儀」

教室の端っこに地球儀が置いてある
我々が住む世界を表した模型
全ては何万分の一に縮尺され
何かが生きているなんて分かりはしない

ここが日本で　ここがアメリカ
そしてここは中国だ
そう言って何億の人間を
何万分の一に縮めてしまうのだ

我々が知覚できる世界なんて
この両の腕が届く範囲しかなくて
地球の裏側なんてわかりっこない
そいつをただの点にしてしまうつもりか

その球の上に　我々の名前は記されていない
その球の上で　我々は存在を許されていない
その球を何万倍に拡大した上で
我々は息をしているというのに

「ツバサ」

ツバサが欲しいと君は言った。
気付かないんだ、君は。
僕たちにはツバサなんていないって事に。
だって、ねえ君。
背中にツバサなんて生やしたって、邪魔になるだけだろう？
普通の服だって着られやしないし、寝る時だって困る。
それとも飛んだまま寝るのかい？　墮ちるよ、きっと。
だから、ねえ君。
ツバサが欲しいなんて言わないで、地上に居場所を探そう。
空ばかり見ることをやめて、隣にいる僕を見てよ。

ずっと傍にしようとしている僕を。

君だって知っているだろ？

太陽に近づきすぎちゃ駄目だって事。

バビロンの塔も、イカロスも。

結局は届かなかったんだ。

今は宇宙飛行なんてものもあるけどね。

生身の体を不安の真ん中に置いて。

だから、ねえ君。

空を飛びたいなんて言わないで、僕の傍へ座って。

ツバサなんてものを背負わないで、その足で歩こう。

疲れたときには僕が、支えてあげるから。

「雲の上」

雲の上に飛んだ 君は誰だ？

いるはずの無いオーバー・ムーン

窓の外を飛ぶ 君は何だ？

漆黒の羽と深紅の瞳

ちっぽけなヒューマン・ビーイングが

やっどこさ造り上げた空飛ぶ機械

そいつをいとも簡単に追い抜いて

風を切る音さえ聞こえてきそうだ

なあ 雲の上はどんな気分だ？

見下ろす地上に何が見える？

この惑星で一番高い山だって

たやすく超えてゆくお前には

どこかに行きたいわけではあるまい

だったら何でお前は飛ぶんだ

「この羽が雲の上に俺を寄越した」

そうやって太陽まで飛んでゆくつもりか

4 感情

「シャドウプリズム」

君の手は綺麗で汚れなんてちっともない
だから僕は差し出された君の手を取ることが出来ない
何故って僕の手はこんなにも汚れているから
君の手を汚したくはないから

闇の中でしか光は見つからない
そんなことはないと言はれりつける
「光の中でこそ分かる光もあるわ」
自分の手を汚したことも無いのに？

綺麗だなんて偽善者の使う言葉で
汚いは自意識過剰なだけ
そう僕は確かにそういう存在だ
でも君は偽善の意味も知らない

闇なんて見ようとしなくて
その中の光を見たこともない
汚れた手に無邪気に触れようだなんて
せめて何にも見えない闇の中でにして

――でも君は闇の中に来る気はないんでしょ？

君は余りにもイノセンス
それが赤ん坊のそれと変わらないとも知らない
むしろだからこそ君は僕に触れようとする
ああ、こんなにも汚い手に

「洗っても洗ってもおちない血と涙」

何という奴だ 俺は
傷つけることしか出来ない
いらぬ優しさを押し売りして

切り刻んでいることに気付かない

この目だけは澄んでいるけれど
この両手は誰かの血と涙で汚い
洗っても洗ってもおちないと
いつの間にか諦めてしまった

何という奴だ 俺は
何も満足に出来やしない
望むものを何一つ掴めずに
この手は汚されてゆくだけ

いつしかこの瞳も汚れて
真性の闇に吞まれてゆくのか
それだけは嫌だと言って
もう一度両手を洗う

「幾つかの悲しみが、」

幾つかの悲しみが
思い出に昇華されるとき
たった一つの安息が
あなたに夢を見せるだろう

そこでは赤い花が咲き
乱れる中をあなたは歩き
向こうの见えない岸に着き
あなたは彼方へ渡ってしまう

そこであなたは裁きを受け
全ての罪を背負いなおし
涙の全てを踏襲し
静寂の中誰かを待つ

あなたは再び顔を上げる
誰かがあなたの前にいる

あなたは最後の涙を流し
もう二度と悲しむことはない

「決めたのです」

あなたの隣は心地よい
華胥の国さえ霞むほど
あなたの隣でただずっと
起きていようと決めました

あなたの言葉は柔らかい
心の動きを真っ直ぐに
あなたの悩みと決断に
ついて行こうと決めました

あなたの吐息は暖かい
思わず鼓動が早くなる
あなたと同じ場所に生き
息をしようと決めました

あなたが纏う静けさは
私の体を包み込む
あなたの選ぶ安らぎに
私はなろうと決めたのです

連作詩『冥。 ～ I knew me.』

冥。

私は誰？ 一教えて、お願いよ。

私は誰？ 一分からないと不安なの。

私は誰？ 一ねえ、誰か訊かせてよ。

「ねえ、お話があるの」

ある少女が言った。

「うん。どうしたの？」

別の少女が答えた。

あのね、夢を見たの。

とっても怖い夢よ。

私が誰だか分からなくなるの。

それは死と同じだわ。

自分が誰だか認識できない。自己同一性の崩壊ね。

眠りから醒めて、起きたときに、

自分が自分じゃなかったときなんてある？

いつも同じ自分。同じカラダと、同じココロ。普通はね。

だけど、ね。

その夢の中だと、私はいつも違う自分なのよ。

私は、私が分からなくなるの。

「わかる、メイ？」

「なんとなく」

「いいわね、あなたは悩みなんてなさそうで」

「そんなことはないよ、マイ」

「本当かしら」

「本当よ。誰だって、悩んでるのよ、きっと」

「うーん」

「そんなものよ、世の中って」

「ねえ、メイ」

「うん？」

「メイの悩みって、何？」

*

脈打ち、消える夢。

ドク。ドク。ドク。

聴こえる。誰の心音、こんなにも強く。或いは、消える直前。

闇の中で、たったそれだけ。

優しい、包むような、闇の中で。

ああ、目を瞑っているんだ。

だからこんなにも、闇が近い。

遠くの、何処か酷く深いところで、小さな灯(ともしび)が、今にも消えそうに揺らいでいる。

光が見たい。

光に触れたい。

どんなに小さくてもいい。どんなに弱くてもいい。そう、今くすぶっている灯のような光でいいから。

光の傍にいたい。

光になりたい。

消えたく、ないよ。

頼れるものは、光だけだから。

それなのに、この場所は、こんなにも、冥い。

それなのに、この場所は、こんなにも、優しい。

ドク。

小さな灯が、また一つ揺らいだ。

そうか、消えるんだ。

だからこんなにも、この鼓動は強いのだ。

人の見る夢。儚い幻。

ドク。

ドク。

ドク。

消える瞬間に思ったのは。

誰だって、きっと盲目なんだ、ってこと。

だってこの二つの目は、闇ばかり映すのだから。

*

揺れる、透明な石。

ゆらゆら。ゆらゆら。

風か。水か。

身を任せて、ゆらゆら。

身を委ねて、ゆらゆら。

漂っているのは、分かっているのに。

どうして、何の音もないんだろう。

どうして、何も見えないんだろう。

それはきっと、閉じているからで。

耳を済ましていないから、何も聴こえず。

目を開けていないから、何も見えない。

五月蠅すぎるから、何も届かず。

眩しすぎるから、何一つ見つからない。

この音を捉える石も、光を捕まえるガラスも、

壊れているからで。

壊したのは、誰だ？

壊れたのは、何故だ？

自分で壊したくせに、もう何一つ入れたくないくせに、

求めている。拒絶したものを。

否定している。否定した自分を。

耳を澄ませ。目を開けろ。

悲鳴と閃光が、そこにある。

無音と、闇の変わりに。

どちらにせよ、否定して、また求めるのだ。

君の耳は石。揺れているただの波。

君の目はレンズ。見えるのは虚像でしかない。

*

パラドックスに対する、アンチテーゼ。

目を閉じようが、開けようが。
何も見えないのだ。変わらない。
だって光も闇も、強すぎるのだから。

*

氷付けにされて、燃える炎。

音もなく、炎は燃えていた。
触れることは叶わなかった。それどころか近づけもしない。
炎は、凍らされていた。
氷はちっとも解けるふうを見せなかった。何の混じり気もない透明な氷は、中で炎が揺らぐたびに、不思議な輝きを見せた。炎は真っ赤に燃え盛り、何か魔物のように四方八方に手を伸ばした。それでも、氷を溶かすことは叶わなかった。
ゆら、と揺れるたびに、きら、と光る。
お互いが、その性質の全くの干渉なしに、ただ美しさだけ造り出している。
それがまるで、願うように。
氷付けにされて、それでも燃える炎。
内側から燃やされて、しかし光る氷。
全ての生き物の知らないところで、炎は、凍る。

*

たった一滴の涙の、海。

ゆらゆら。
海の中、はるか深い闇へと身を沈めてゆくイメージ。
空気の泡が下から自分を追い越してゆく。この水の檻の向こうには光があるとわからせるギリギリの深さで、沈み込んでゆく自分とは対照的にのぼってゆく泡。
ゆらゆら。
泡は幾つもの、ただ光のほうへと向かってゆく。
僕を、おいて。
全ての空気と引き換えに、僕は暗黒へと堕ちて行く。
ゆっくりと。それと分からないスピードで。

気がついたら光が遠くなっていた、そのくらいで。

酷く感傷的になっている自分に、気付いた。

それはそう、海の中で涙が見分けられるほどに。

「 」

何かを叫ぼうとして、

何を叫んだのかも分からずに、闇の底へ沈んでいった。

*

真っ白の壁と、ドアのない部屋。

ふっ、と、眼が覚めた。

目に入ったのは、真白い天井。

ベッドから身体を起こして、見回すと、一面に白い壁。ドアも窓もない。小さな部屋に、ベッドが一つ。全てが白く、しかし強固だった。

ここは、どこだろう。

夢を見ていた気がする。ゆっくりと沈む夢。消える灯と、広がる闇。ゆれて、光り、沈む。そんな夢。

思い出せない。イメージだけ、思考にある。

思い出せない。

私は、誰なんだろう。

ふいに、泣きたくなった。

こんなちっぽけな、色のないところで、自分が誰かもわからずに、夢の残滓だけ掻き集めて、生きていかなければならないのか。

瞳に溜まった水、頬に伝う雫の名前も意味も知らないで。

目を開けて、——何も見えない。

目を閉じて、——何も見えない。

ゆれて、

光り、

沈む。

哀しくなって、ぽりぽろとシーツを濡らした。

悲しくなって、どもる様に嗚咽を漏らした。

泣きつかれて、眠って。

また夢の残り滓を、集めるのだろう。

*

表情のない顔。

その男はずっと見ていた。

地を這う動物たちが、豆粒ほどにしか見えないところで。

それでも、その男にはすべての生物が見えた。

ニンゲン、という存在が在った。

猿から進化したその高等生物は、その発達した知能故に、高等生物だと疑わなかった。

男は退屈していた。

それはそうだ。何億年、いや何兆年もの間、男は見続けてきたのだ。

男は全ての時間と空間の外にいた。それら全てさえ、男の生み出したものだった。

つまらないな。

男は呟いた。

どいつもこいつも、同じにしか見えん。

没個性、などという生ぬるい状態ではない。

その存在全てに、違いが感じられないのだ。

或いは、その存在全てに、

もう進化する可能性が、消えてしまったのだ。

それでは、つまらない。

男は右手で一つ、叩いた。

パチン。

世界は崩壊し、後には何も残らなかった。

「また、作り直しか」

全くの無表情で、男は言った。

*

遙かなる系譜 ～ Endless Waltz

この体にそれほどの歴史があるものか。

この心にそれほどの物語があるものか。

「そう思うのなら、踊りませんか？」

少女が一人、少年に手を差し伸べた。

「そんなことをして、何の意味があるっていうんだ」

少年はその手を振り解いた。

「そんなこと言わないで、さあ」

それでも少女は引かなかった。少年を強引に立たせると、ステップを踏んだ。

「いち、に、さん、ほら」

少年は動かない。

「楽しいですよ、ね」

少年は一步踏み出した。

「そう、そんな感じです」

少女は笑った。ふわり、綺麗に。

少年は少女に合わせた。

いち、に、さん

いち、に、さん

少年と少女は廻りだす。

少年と少女は通いだす。

湖の上を、滑る、滑る。

踊る、踊る、水面に波立つ、

広がる、拡げて、波紋の花咲く。

いちにさん

いちにさん

終わり無い、少年と少女のダンス。

——この体にそれほどの歴史がなくとも。

この心にそれほどの物語がなくとも。

紡いでゆける。今から君と。

踊ってられる、心地よいリズム。

終わり無い、ワルツ。

君と僕の、物語。

*

二重螺旋と、一本の管を通る液体。

少年の中で、今も描かれる二つの螺旋。

長い長いそれらは、生まれたときから変わらず少年の中にあった。

少年の中を、絶えなく巡る液体。

紅い紅いそれは、生まれたときから変わらず流れていた。

少年を作っている、二つの螺旋と紅い液体。

永き世を、それは渡ってきた。

流れる体を変えて。

描く心を変えて。

少年は、たどれない。

その永きを、たどれない。

少年に出来ることは、ただ。

その流れを、伝えることだけ。

その永きを、絶やさぬことだけ。

少年は、少女と出逢った。

*

ヨモツヒラデヴァイド

それはそれは昔のお話。まだこの国が出来て間もない頃。

最初の男女が、誓ったのだ。

別れの言葉は、誓いなのだ。

だから、ねえ君。

僕達の別れも、誓いだと。

信じて、かまわないだろうか。

君はもう二度と人を好きにならないと言った。

だけど、ねえ君。

そのうち君は、きっと誰かを好きになる。

僕でなく、別の誰かを。

「嫌いだから、別れるんじゃない」なんて。

そんなやりきれないことを、聞きたくはなかった。

だから、そう僕は。

言うのだ。そう言った君に。

「好きだけれど、お別れだ」って。

だから、ねえ君。

僕達の言葉も、誓いにはならないだろうか。

誓うよ、僕は。

君なんか忘れて、別の人を好きになるって。

だけど、ねえ君。

本当に忘れてしまえるわけなんて、どこにあるというんだ。

だから、ねえ君。

言ってくれ。たった一言。

僕のことを、忘れない、って。

そうすれば僕は、君のことを。

誓うよ、僕は。

君のことを、忘れない、と。

だから、誓おう、二人、最後に。

「好きと言う気持ちを、忘れてしまっても。

「忘れない。絶対に」

君のことを、忘れない。

*

忘冥境時代

今日も死人が蘇った。

三軒先の病院で。

今日も死体が動き出した。

幾つものコードをその身に繋いで。

——忘れてしまったのか。死と言うものを——

歩き出した死体は、しかし何も喋らない。
空ろな目を伏せて、ただ動いているだけ。
赤信号もワカラズに、車に撥ねられて。
死体は、死んだ。

——忘れてしまったのか。その境目を——

今日もまた一つ蘇る。
死ぬことを忘れてしまった死体が。
生きることも出来ない死体が。
あるべき世界を失ったモノが。

生と死の境目の、
忘れてはならない深淵の、
中間地点にいる人が、
世の中には多すぎる。

*

真っ黒の世界と、果ての無い空間。

闇の中にいた。
いつからかは分からない。何故なのかは分からない。
気付いたときには、何も見えなかった。
どれくらいいるのかも分からない。それどころか、
自分というものがどんなのであったか、全く思い出せない。
「わたし」というこの意識が、どんなもので、何のために。
何故ここに在るのか、ワカラナイ。
何処に行っても何も変わらない。或いは、何処にも行けない。
ふと、思った。
「わたし」は、「それ」自身なんじゃないか、って。
見えない「それ」。分からない「それ」。
「わたし」は、「闇」なんじゃないか、って。

もしそうなのだとしたら――

そうだ、光を見つけよう。

きっとその光は、闇を覆い隠してしまえるだろう。

そう、光になればいい。

そうしたら、光は。

自分を覆い隠してくれる、闇を求めるのかも知れない。

*

虚構世界全図

その本には、全ての答えが載っている。

だがしかし、何の答えかは分からない。

その本には、全ての悩みが載っている。

だがどれ一つとして、答えが書かれているものはない。

その本には、全ての歴史が載っている。

だがしかし、それが何故起こったかは分からない。

その本には、全ての未来が載っている。

だがどれ一つとして、何故起こるのかは書かれていない。

その本には、世界の全てが書かれている。

だがしかし、それが何処の世界なのかは分からない。

その本には、全ての世界が書かれている。

だがどれ一つとして、どんな世界だか書かれているものはない。

その本には、全ての知識が詰まっている。

だがしかし、それが正しいかどうかは分からない。

その本には、全ての物の使い方が載っている。

だがどれ一つとして、何の使い方かは載っていない。

その本には、全ての主人公が載っている。
だがしかし、どんな物語を紡ぐのかは書かれていない。

その本には、全ての物語が綴られている。
だがどれ一つとして、誰の物語かが書かれているものはない。

最後の本――

その本には、全ての嘘と真実が書かれている。
だがしかし、書かれているものが嘘か真実かは書かれていない。

*

許したナイフと、癒えない傷跡。

君にしか聞かせられない話がある。
そう言って男は女を見つめた。
このことは絶対に秘密にして欲しい。
男は言った。女は頷いた。
ええ。私、誰にも喋らないわ。
どうか、……いや、やっぱり止めよう。
男は躊躇う。或いは、躊躇わせない。
私は大丈夫よ、何でも言って。
女は促す。或いは、やめられない。
本当かい？
男は念を押した。若しくは、固める。
本当よ。私にしか話せないんでしょ。
女は突き進む。若しくは、堕ちて行く。
じゃあ、言うけど……びっくりしないで。
男は覚悟を決める。或いは、決めさせる。
ええ。
女は覚悟を決めた。或いは、させられた。

一本のナイフが、女を刺して。
男は言った。
死のう。一緒に。エイエンに。なろう。

キラリ、と光る。

女は倒れ、男は言った。

大丈夫。僕もすぐに行く。一緒に……

女は……

そこで女は、語るのをやめてしまった。

私、死んでもいいと思ったんです。

暫くして、女は言った。

彼がそれを望むのなら、私は受け入れようと思ったんです。彼と一緒に死のうというのなら、私は彼の言うエイエンになってもいいと、思ったんです。

だけど。

女は一瞬口を止めたが、またすぐに話し出した。

彼が死んでしまって、私だけが助かって。

私、死にたくないんです。だけど、死んだほうがいいんです。

それでも、死にたくないんです。

そこで女は本当に一言も喋らなくなった。

病院の白いシーツを握り締めて、黙り込んだ。

破りそうなほど握っていると、寝巻きの、わき腹の辺りに、まるで紅い血が、染みていった。

*

二人の少女。

あるところに少女が二人、いました。

一人の名前はマイ。もう一人はメイです。

「My」という少女と、「冥」という少女。

二人は、一人でした。

*

I knew me.

私は誰？ ー知ってるわ、そんなこと。

私は誰？ ーだって、私は私だもの。

私は誰？ ーその質問に、何の意味があるの？

「ねえ、お話があるの」

ある少女が言いました。

「うん、どうしたの？」

別の少女が答えました。

あのね、私は知ってたわ。

私が誰なのかも、何でここにいるのかも。

でも、貴女は最初から知らなかった。

それってね、凄いことよ。

だって、見つけられるもの。自分が誰なのかを。

あと、存在理由とかも、ね。

知らなくていいのよ、自分が誰かなんて、最初は。

自分が誰なのかも、存在理由も。

自分で決めればいいんだわ、好きなように。

そういうの、自分で決められるのって、凄くない？

自分が、自分の好きなようになっていけるのよ。

「わかる、マイ？」

「なんとなく」

「ま、しょうがないか」

「うーん。でもね、メイ。私は知りたいな。私が誰なのかを」

「うん。だから、探すんでしょ」

「最初から分かっているほうがいいと思うけどね」

「探せることって、凄いことだわ。それが出来ない人だっているもの」

「そうなのかなあ」

「だからね、マイ」

「うん？」

「私は忘れたの。私が誰なのかを」

*

小品集（１）

<http://p.booklog.jp/book/68826>

著者 : yukumemi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yukumemi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68826>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68826>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ